

離島におけるひとり暮らし高齢者の 生活と親族・地域ネットワーク

——沖縄県宮古島市での悉皆調査の結果を踏まえて——

河 合 克 義

はじめに

親族・地域ネットワークの状況も地域によって、その特徴は異なる。筆者はネットワークが希薄な状態になりやすい対象として、ひとり暮らし高齢者を選び、その実態について調査を通して把握してきている。ひとり暮らし高齢者が割合として高い地域は、後に示すように（１）大都市、（２）過疎地、（３）島嶼の３つである。これまで筆者は、主なものとして、大都市地域では東京都港区と神奈川県横浜市での調査、過疎地では山形県全市町村での調査を実施してきた⁽¹⁾。

本稿では、３つ目の地域類型である島嶼として沖縄県宮古島市を取り上げたい。

注

(1) 調査報告書としては以下を参照されたい。

『東京都港区におけるひとり暮らし高齢者の生活と社会的孤立に関する調査報告書—地域ネットワークの新たな展開を求めて—』東京都港区社会福祉協議会、1995年。

『港区におけるひとり暮らし高齢者の生活実態と社会的孤立に関する調査報告書』東京都港区社会福祉協議会、2006年。

『港区におけるひとり暮らし高齢者の生活と意識に関する調査報告書』港区政策創

造研究所，2012年。

『山形県におけるひとり暮らし高齢者の生活と意識に関する調査報告書』山形県民生委員児童委員協議会，2012年。

『横浜市鶴見区におけるひとり暮らし前期高齢者の生活と介護予防に関する実態調査報告書』横浜市鶴見区福祉保健センターサービス課，2007年。

『横浜市鶴見区におけるひとり暮らし後期高齢者の生活と介護予防に関する実態調査報告書』横浜市鶴見区福祉保健センターサービス課，2007年。

1 ひとり暮らし高齢者の生活と地域性

我が国の将来人口推計をみると，全国的に高齢者世帯が増加してきていること，そして，とりわけひとり暮らし高齢者が増えていることが指摘される。

ひとり暮らし高齢者の世帯の割合は全国均一ではない。地域的偏りがある。そこで，ひとり暮らし高齢者の出現率を「高齢者のいる世帯中の単身高齢者の割合」とし，その数値を国勢調査にもとづいて自治体別に算出して分析してみよう。

その結果を見ると，ひとり暮らし高齢者の出現率の高い地域が，①島嶼，②過疎地，③大都市の3つに分類できる（詳細は，河合克義『大都市のひとり暮らし高齢者と社会的孤立』〈2009年，法律文化社〉を参照されたい）。

表1は，1995年と2010年の国勢調査の結果データを使って，ひとり暮らし高齢者の出現率の上位30位までの自治体を地域類型に基づいて分類したものである。特徴を見てみよう。1995年には，島嶼は18，過疎地は10，大都市は大阪の2区だけだったが，2010年には，島嶼は11，過疎地は3，大都市は16と，大都市でひとり暮らし高齢者が非常に増えて来ている。繁栄の中心にある大都市においてひとり暮らし高齢者が急増しているのである。

他方，島嶼と過疎地ともに，ひとり暮らし高齢者の出現率の高い自治体が減少してきている。ただし，このことで島嶼と過疎地においてひとり暮らし高齢

者の問題が小さくなっているわけではないことを指摘しておきたい。この2つの地域において出現率の高い自治体の数が減少していること背景には、町村合併といういわば人為的な操作の結果、高出現率の自治体そのものが解散してしまった事実があることに注意したい。

2010年の国勢調査では、ひとり暮らし高齢者の出現率について自治体別に上位を見ると、全国一高い自治体は大阪市西成区の66.1%である。次いで東京都青ヶ島村の60.0%、大阪市浪速区の59.0%、東京都御蔵島の55.0%となっている。都市部では大阪府大阪市の区部、東京都、兵庫県神戸市、福岡県福岡市、広島県広島市のそれぞれの区部が見られるが、この中で大阪市の区部が他と比べて著しく多い。他方、東京都の伊豆七島は、押し並べてひとり暮らし高齢者の出現率が高い。

表1の中で沖縄県の自治体の一つある。座間味村で、ひとり暮らし高齢者の出現率は41.5%、これは全国で上から29番目に位置する。

では、沖縄県におけるひとり暮らし高齢者の出現率を自治体別に2010年の国勢調査に基づいて見てみよう。

表2のとおり、ひとり暮らし高齢者の出現率は、全国平均が24.8%であるが、沖縄県は25.4%となっている。沖縄県の市部が26.2%、郡部はそれより若干低く23.0%である。

沖縄県下でひとり暮らし高齢者の出現率が高い自治体は、すでに触れたように座喜味村で41.5%、次いで伊是名村が34.9%、竹富町が34.6%、金武町が34.4%となっている。

宮古島市のひとり暮らし高齢者の出現率は29.9%で、県下で12番目である。市部では、ひとり暮らし高齢者の出現率が最も高い自治体である。那覇市は14番目で、その出現率は29.5%となっている。

本稿では、沖縄県においてもひとり暮らし高齢者が多い宮古島市の実態を分析したい。宮古島は「沖縄本島から南西に約300km、東京から約2000km、北

表1 1995年、2010年における地域類型別自治体のひとり暮らし高齢者出現率

1995年			2010年		
(1) 島嶼			(1) 島嶼		
	自治体名	出現率[%]		自治体名	出現率[%]
1	東京都青ヶ島村	56.7	1	東京都青ヶ島村	60.0
2	長崎県高島町	52.1	2	東京都御蔵島村	55.0
3	東京都御蔵島村	45.9	3	鹿児島県十島村	50.9
4	島根県知夫村	43.0	4	東京都小笠原村	49.2
5	山口県東和町	42.7	5	東京都三宅村	47.4
6	長崎県岐宿町	42.6	6	鹿児島県三島村	45.6
7	長崎県玉之浦町	42.6	7	鹿児島県大和村	43.1
8	鹿児島県三島村	42.3	8	鹿児島県瀬戸内町	42.9
9	長崎県伊王島町	42.1	9	東京都大島町	42.4
10	長崎県宇久町	41.8	10	山口県上関町	42.0
11	鹿児島県住用村	41.0	11	沖縄県座間味村	41.5
12	鹿児島県下甕村	40.5	(2) 過疎地		
13	長崎県崎戸町	40.2	1	鹿児島県宇検村	46.5
14	長崎県三井楽町	40.1	2	山梨県早川町	44.5
15	長崎県富江町	39.7	3	奈良県下北山村	44.2
16	鹿児島県瀬戸内町	38.8	(3) 大都市		
17	鹿児島県十島村	38.5	1	大阪府大阪市西成区	66.1
18	愛媛県魚島村	38.4	2	大阪府大阪市浪速区	59.0
(2) 過疎地			3	兵庫県神戸市中央区	50.1
1	愛媛県別子山村	44.7	4	福岡県福岡市博多区	46.7
2	奈良県下北山村	43.8	5	兵庫県神戸市兵庫区	46.2
3	三重県紀和町	42.2	6	福岡県福岡市中央区	45.9
4	和歌山県北山村	42.1	7	東京都新宿区	45.2
5	鹿児島県知覧町	40.1	8	大阪府大阪市中央区	44.7
6	岐阜県藤橋村	38.2	9	東京都杉並区	44.6
7	鹿児島県東串良町	37.5	10	東京都渋谷区	44.4
8	鹿児島県鹿島村	37.5	11	広島県広島市中区	44.1
9	高知県東洋町	37.3	12	東京都豊島区	43.6
10	愛媛県瀬戸町	37.2	13	愛知県名古屋市中区	43.4
(3) 大都市			14	大阪府大阪市北区	43.3
1	大阪府大阪市西成区	43.3	15	静岡県熱海市	43.1
2	大阪府大阪市浪速区	37.9	16	大阪府大阪市東淀川区	41.3

資料：1995年、2010年国勢調査にもとづき河合克義が作成

※ひとり暮らし高齢者の出現率とは「高齢者いる世帯中の単身高齢者の割合」

表2 沖縄県におけるひとり暮らし高齢者の出現率 (2010年)

地域	総人口 【人】	年齢不詳 【人】	65歳以上 人口 【人】	65歳以上 人口割合 (「年齢不 詳」を除く) 【%】	高齢者の いる世帯 総数 【世帯】	単身高齢者 世帯総数 【人/世帯】	ひとり 暮らし 高齢者 の出現率 【%】
全国	128,057,352	976,423	29,245,685	23.0	19,337,687	4,790,768	24.8
沖縄県	1,392,818	8,038	240,507	17.4	158,798	40,390	25.4
沖縄県市部	1,078,992	7,552	181,925	17.0	121,292	31,780	26.2
沖縄県郡部	313,826	486	58,582	18.7	37,506	8,610	23.0
島尻郡 座間味村	865	0	201	23.2	147	61	41.5
島尻郡 伊是名村	1,589	0	454	28.6	315	110	34.9
八重山郡 竹富町	3,859	0	797	20.7	570	197	34.6
国頭郡 金武町	11,066	0	2,558	23.1	1,668	574	34.4
島尻郡 渡名喜村	452	0	151	33.4	111	38	34.2
島尻郡 北大東村	665	4	103	15.6	79	27	34.2
国頭郡 国頭村	5,188	0	1,429	27.5	964	322	33.4
島尻郡 渡嘉敷村	760	0	146	19.2	107	35	32.7
島尻郡 粟国村	863	0	291	33.7	194	63	32.5
国頭郡 大宜味村	3,221	0	993	30.8	678	213	31.4
国頭郡 今帰仁村	9,257	0	2,457	26.5	1,537	469	30.5
宮古島市	52,039	51	12,073	23.2	7,850	2,347	29.9
島尻郡 南大東村	1,442	0	301	20.9	213	63	29.6
那覇市	315,954	4,031	55,644	17.8	38,556	11,367	29.5
宮古郡 多良間村	1,231	0	322	26.2	228	67	29.4
国頭郡 伊江村	4,737	0	1,263	26.7	828	237	28.6
島尻郡 伊平屋村	1,385	5	349	25.3	240	68	28.3
沖縄市	130,249	174	20,137	15.5	13,940	3,927	28.2
中頭郡 嘉手納町	13,827	15	2,898	21.0	1,897	517	27.3
名護市	60,231	1,471	10,227	17.4	6,578	1,782	27.1
石垣市	46,922	116	7,989	17.1	5,444	1,465	26.9
国頭郡 宜野座村	5,331	0	1,126	21.1	668	178	26.6
八重山郡 与那国町	1,657	7	321	19.5	207	55	26.6
国頭郡 本部町	13,870	0	3,411	24.6	2,213	587	26.5
島尻郡 久米島町	8,519	51	2,135	25.2	1,467	368	25.1
宜野湾市	91,928	1,090	13,428	14.8	9,110	2,276	25.0

離島におけるひとり暮らし高齢者の生活と親族・地域ネットワーク

国頭郡 東村	1,794	0	464	25.9	329	80	24.3
島尻郡 与那原町	16,318	0	2,737	16.8	1,770	426	24.1
浦添市	110,351	554	15,846	14.4	10,417	2,504	24.0
中頭郡 北谷町	27,264	153	4,360	16.1	2,814	664	23.6
糸満市	57,320	16	9,480	16.5	5,849	1,331	22.8
うるま市	116,979	44	20,445	17.5	13,353	2,896	21.7
国頭郡 恩納村	10,144	32	2,017	19.9	1,328	279	21.0
南城市	39,758	5	8,415	21.2	5,187	1,011	19.5
中頭郡 北中城村	15,951	2	3,220	20.2	1,818	332	18.3
中頭郡 西原町	34,766	43	4,867	14.0	3,169	577	18.2
島尻郡 八重瀬町	26,681	4	4,704	17.6	2,962	529	17.9
豊見城市	57,261	0	8,241	14.4	5,008	874	17.5
中頭郡 読谷村	38,200	6	6,370	16.7	4,191	693	16.5
島尻郡 南風原町	35,244	58	5,224	14.8	3,018	497	16.5
中頭郡 中城村	17,680	106	2,913	16.6	1,776	284	16.0

資料：国勢調査（2010年）のデータをもとに河合克義が作成

※ひとり暮らし高齢者の出現率とは「高齢者のいる世帯中の単身高齢者の割合」

緯24～25度、東経125～126度に位置し、大小6つの島（宮古島、池間島、来間島、伊良部島、下地島、大神島）で構成」されている。市の総面積は204平方km、人口は55,125人（2012〈平成24〉年12月1日現在）で、人口の大部分は平良地区に集中」している。「島全体がおおむね平坦で、低い台地状を呈し、山岳部は少なく、大きな河川もなく、生活用水等のほとんどを地下水に頼って」いる（宮古島市のホームページ参照）。

市の基本構想（平成19〈2007〉年度～28〈2016〉年度）によれば、「今後、老年人口割合は若干の増加傾向、生産年齢人口割合は横ばい、年少人口割合は減少傾向が続く」と予測されている。

2010年の国勢調査によれば（表2参照）、宮古島市の高齢者人口割合は23.2%となっている。高齢者人口割合は市部平均が17.0%であるが、宮古島市は市部の中で一番割合が高い。沖縄県において市部レベルでは宮古島市が最も高齢化が進んでいる地域と言えるのである。

一般に、沖縄は親族・地域のつながりの強いところである。その中で沖縄県の離島は、どのような特徴を持つのであろうか。本稿は、ひとり暮らし高齢者の生活実態と、とりわけ親族・地域ネットワークの状態を分析するものである。離島における親族・地域ネットワークが希薄な状態つまり孤立状態にある高齢者の量と質について、調査結果のデータから考察をおこないたい。

2 調査の概要

宮古島市におけるひとり暮らし高齢者を対象とした調査の概要について述べておこう。

調査は、2013年5月1日現在、住民票上の65歳以上単身世帯全数2,728世帯を対象に、民生委員が訪問し、実質ひとり暮らしの高齢者914人に調査票を配布し、回収したものである。

調査の主体は、宮古島市社会福祉協議会である。なお、調査の設計は、宮古島市社会福祉協議会と明治学院大学社会学部付属研究所の一般研究プロジェクト「離島の高齢者生活と住民福祉活動のあり方に関する研究」班（研究代表：河合克義、研究メンバー：岡本多喜子、板倉香子）が共同で行った。

本調査は1次と2次の2段階の調査からなる。1次調査の調査時点は2013年5月1日現在である。調査期間は同年6月と7月の2か月間である。2次調査の調査実施は2013年9月である。

1次調査は、留め置きとし、民生委員が対象世帯を訪問し、調査票を配布し、その後、直接回収をした。2次調査は、1次調査で訪問面接を受け入れてくれた方に対し、事前連絡をし、受け入れ日時を調整し、訪問し面接してお話を伺った。

1次調査の調査依頼数は914ケース（民生委員が訪問し、ひとり暮らしと判断した人）であるが、回収数は603ケースで、回収率は66.0%であった。無効

のケースが29ケースあり、それを除いた有効回収数は574ケース、有効回収率は62.8%となった。

1次調査の回答者のうち、2次調査の受け入れを受諾してくれた方は61人で、全体の10.6%であった。この61ケースについて地区を考慮して、訪問面接をおこなった。

本調査の報告書は、宮古島市社会福祉協議会から『沖縄県宮古島市におけるひとり暮らし高齢者の生活と意識に関する調査報告書』として、2014年3月に刊行されている。

3 調査対象者の特徴

まず、本調査対象の特徴を大まかに把握するため、1次調査で回収された574ケースについての基本集計を見てみたい。

(1) 性別・年齢

1) 性別

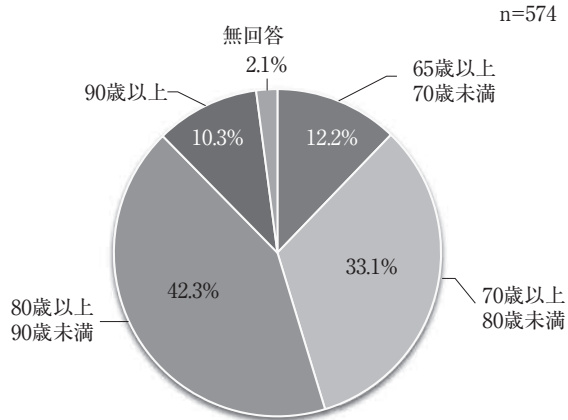
性別については、女性が70.9%、男性が27.7%であった（無回答1.4%）。宮古島市のひとり暮らし高齢者の約7割を女性が占めている。

2) 年齢

年齢の分布を見ると（図1）、「65歳以上70歳未満」が12.2%、「70歳以上80歳未満」が33.1%、「80歳以上90歳未満」が42.3%、「90歳以上」が10.3%となっている。

最高年齢は102歳、平均年齢は79.7歳である。このように、ひとり暮らし高齢者の約半数が80歳以上となっている。

図1 年齢



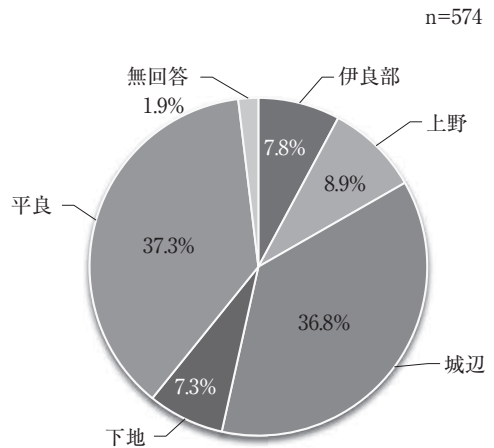
(2) 住まいについて

1) 居住している地区

宮古島市は2005年に平良市，城辺町，下地町，上野村，伊良部町の合併により発足しているが，旧市町村の名称を地区名としている。

回答してくれたひとり暮らし高齢者の居住地区を見ると，図2のとおり，最も割合が高い地域が「平良」で37.3%，次いで「城辺」が36.8%である。この2つで74.1%と全体の約7割半を占めている。次いで「上野」が8.9%，「伊良部」が7.8%，「下地」が7.3%となっている。

図2 居住地区

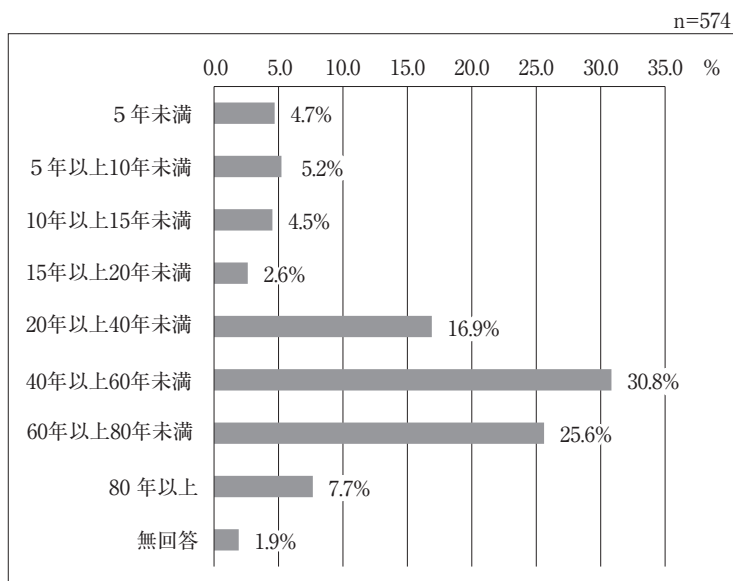


2) 現住所の居住年数

現在の居所での居住年数については（図3），平均居住年数が45.7年となっており，居住年数が40年以上の人が64.1%と約6割半を占める。

反対に，現住所での居住年数が少ない人，例えば10年未満の合計は9.9%と1割程度で多くはない。

図3 現住所の居住年数



3) 出身地

出身地については，回答者の95.3%が「宮古島市内」となっている。「宮古島市以外の沖縄県内」の人が2.3%，「沖縄県外」が1.9%，「国外」が0.2%，無回答0.3%となっている。

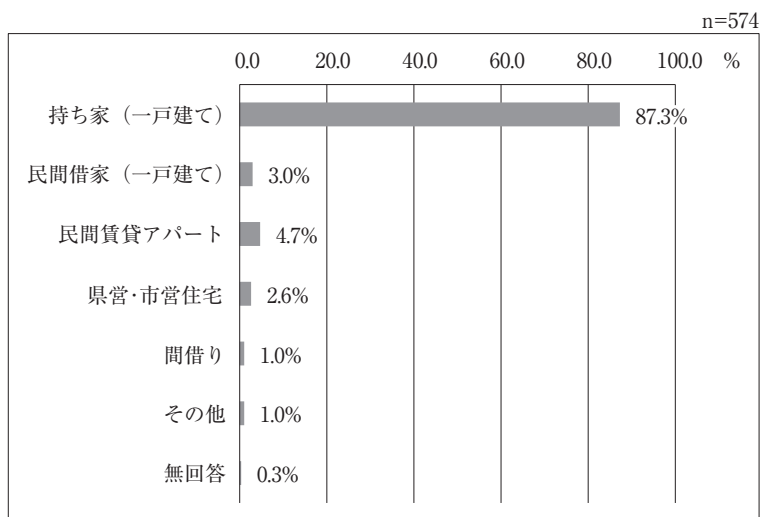
このように，回答者のほとんどが宮古島市内の出身である。

4) 住宅の種類

住宅の種類を図4で見ると、「持ち家」が87.3%と、ひとり暮らし高齢者の約9割が持ち家に住んでいる。

他方、「民間借家」「民間賃貸アパート」「間借り」の合計は8.7%、県営・市営住宅は2.6%と少ない。

図4 住宅の種類



5) 住宅の困りごとの有無

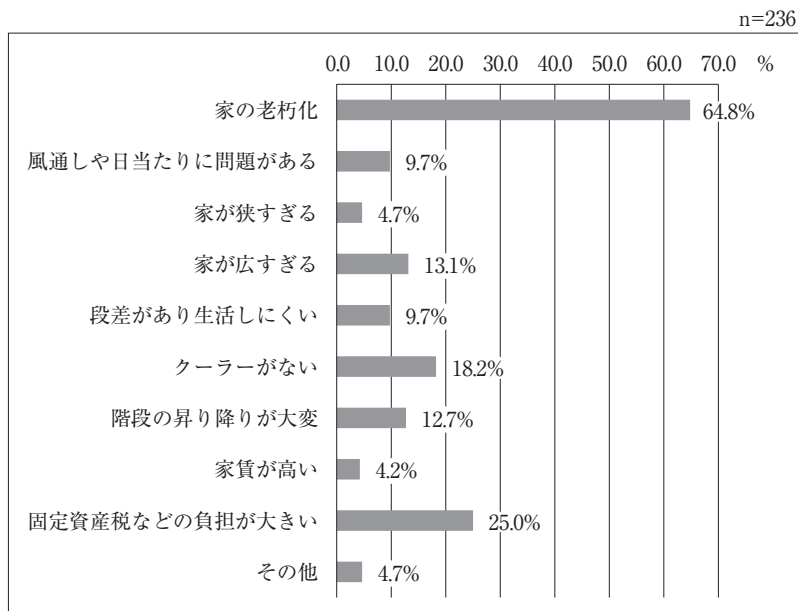
住宅に関する困りごとについては、困りごとが「ある」が41.5%、「ない」が52.6%であった（無回答5.9%）。

6) 住宅の困りごと

住宅に関する困りごとがある人に、困りごとの中身を尋ねた（図5）。複数回答であるが、「家の老朽化」が全体の64.8%と最も割合が高く、次いで「固

定資産税などの負担が大きい」が25.0%、「クーラーがない」が18.2%、「家が広すぎる」が13.1%、「階段の昇り降りが大変」が12.7%となっている。

図5 住宅の困りごと（複数回答）

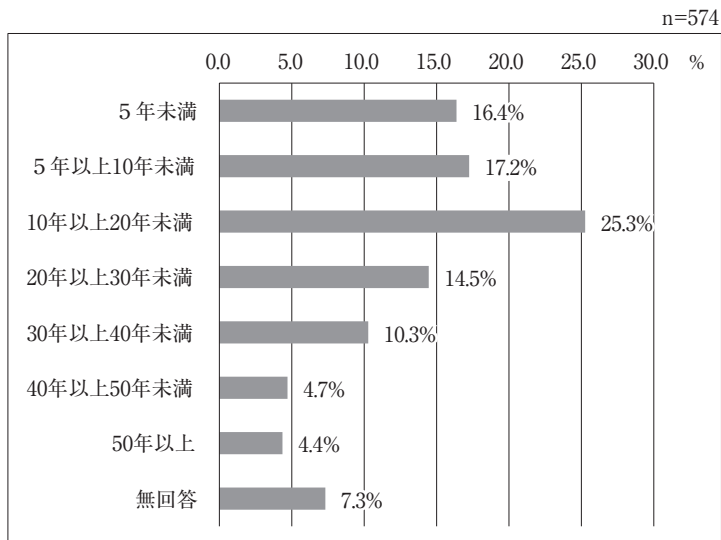


7) ひとり暮らしの年数

ひとり暮らしの年数を見ると（図6）、「10年以上20年未満」が25.3%、20年以上の合計が33.9%となっている。他方、ひとり暮らしの年数の少ない「5年未満」が16.4%、「5年以上10年未満」が17.2%となっている。全体の平均は17.1年である。

以上のように、20年以上の人が3割半弱を占めている一方、5年未満というひとり暮らしの年数が短い人が1割半程度となっている。

図6 ひとり暮らしの年数



(3) 健康状態

1) 本人の健康状態についての意識

本人が健康状態についてどのように意識しているかを図7によって見てみよう。

「普通」が29.1%と最も割合が高く、次いで、「あまり健康でない」が25.3%となっている。健康な人（「非常に健康」+「まあまあ健康」）が3割強（32.6%）、健康が良くない人（「あまり健康ではない」+「健康ではない」）が3割半（35.8%）となる。

2) 日常生活での介助の必要性

日常生活での介助の必要性については（図8）、「ほとんど自分でできる」が70.9%と最も割合が高く、次いで「一部介助，を必要とする」が17.9%、「ほとんどすべてに介助が必要とする」が6.4%となっている。

一部あるいはほとんどすべて介助を必要とする人が、全体の2割半（24.3%）を占めている。

図7 健康状態

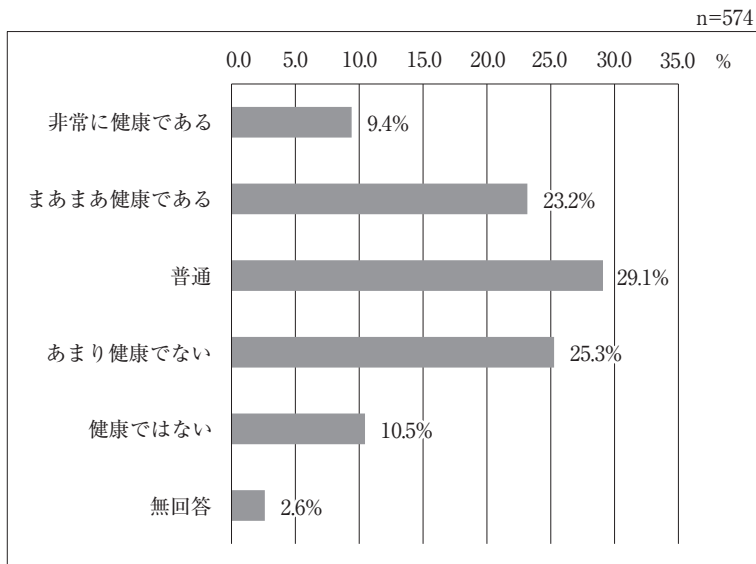
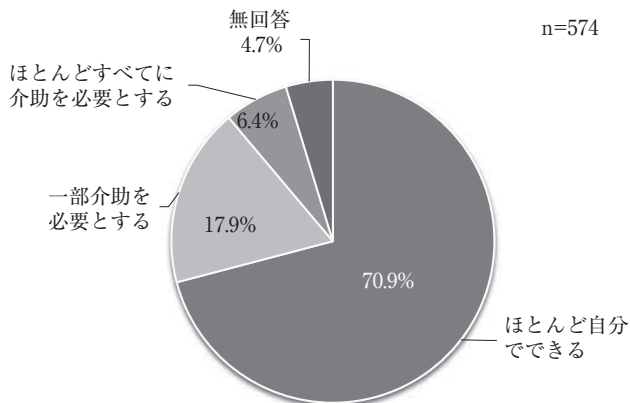


図8 日常生活での介助の必要性



3) 介護保険サービスの利用状況

介護保険サービスを利用しているかどうかについては、「利用していない」が72.3%と約7割を占めていた。他方、「利用している」は23.2%となっている。なお、無回答は4.5%であった。このように、ひとり暮らし高齢者で介護保険サービスを利用している人は2割強であった。

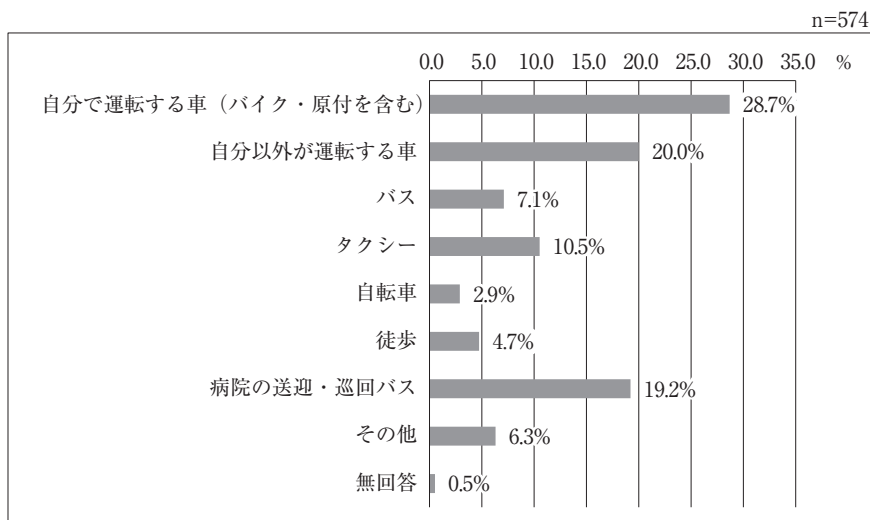
4) 通院の状況

現在、通院しているかどうかについては、「通院している」が66.2%である。一方、「通院していない」が28.2%と3割弱となっている。無回答は5.6%である。

5) 通院時の交通手段

病院へ行く際の交通手段については、図9のとおり、「自分で運転する車（バイク・原付を含む）」が28.7%と最も割合が高く、次いで「自分以外が運転する

図9 通院時の交通手段



る車」が20.0%、「病院の送迎・巡回バス」が19.2%となっている。また「タクシー」を利用する人が10.5%、「バス」利用は7.1%であった。

6) 緊急通報システム設置の有無

緊急通報システムを設置しているかどうかについては、「設置している」が11.0%、「設置していない」が82.1%、無回答が7.0%となっている。

このように、ひとり暮らし高齢者で緊急通報システムを設置している人は1割程度である。

(4) 職業について

1) 本人の最長職

次に、調査対象者本人の生涯の中で最も長かった職業、すなわち最長職についてみてみよう(図10)。

最長職として、まず「自営業(農業)」が50.3%と最も割合が高い。本調査では女性が7割となっているが、「専業主婦」の割合は高くない。「専業主婦・専業主夫・無職」で10.3%であった。多くの女性が仕事をしてきたのである。これは宮古島市の特徴であろう。

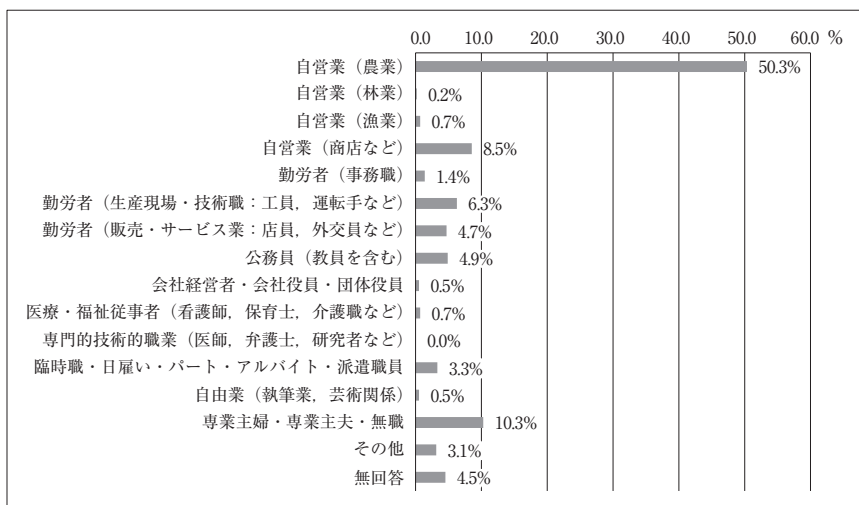
「自営業(商店など)」は8.5%であった。「勤労者(生産現場・技術職:工具、運転手など)」が6.3%、「勤労者(販売・サービス業:店員、外交員など)」が4.7%、「公務員(教員を含む)」が4.9%となっている。

2) 婚姻歴の有無

結婚したことがあるかどうかについては、「結婚したことがある」が88.5%、「結婚したことはない」が9.4%、無回答が2.1%であった。全国的には、ひとり暮らしの高齢者の13.2%が未婚である(2010年国勢調査)ので、宮古島市のひとり暮らし高齢者の未婚率は低い。

図10 本人の最長職

n=574



3) 配偶者の最長職

結婚しているひとり暮らし高齢者の配偶者の最長職を見てみよう。

図11のとおり、「自営業 (農業)」が49.4%と最も割合が高い。次いで「勤労者 (生産現場・技術職：工具、運転手など)」が7.9%、「自営業 (商店など)」が7.5%、「公務員 (教員を含む)」が6.9%となっている。このように配偶者の職業として農業がほぼ半数を占めている。

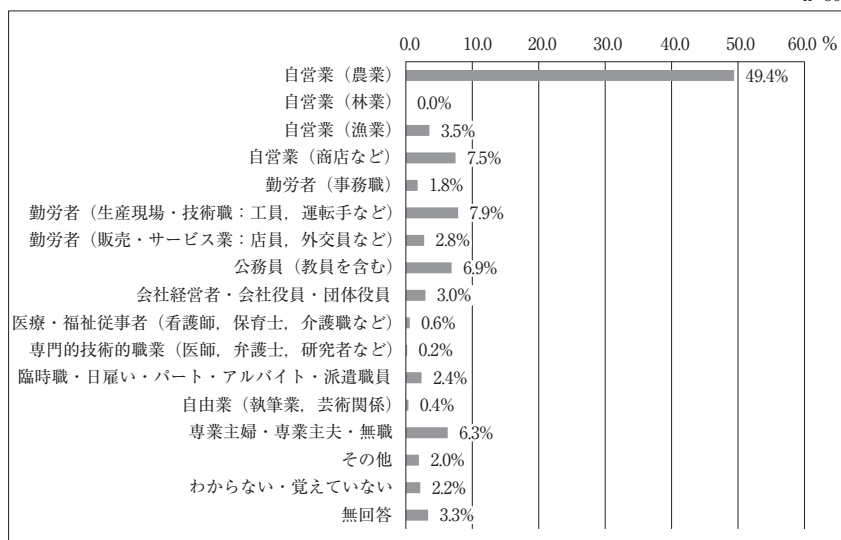
4) 現在の仕事の有無

現在、収入のある仕事 (自家消費等の農漁業を除く) をしているかどうかについては、「仕事をしている」が7.0%、「仕事をしていない」が87.8%、無回答が5.2%であった。

ひとり暮らし高齢者の9割近くは仕事をしていない。

図11 配偶者の最長職

n=508



(5) 地域・生活での困りごと

1) 地域の困りごと

住んでいる地域の困りごとについては（複数回答、図12）、「台風などの防災対策」が25.5%と最も割合が高く、次いで「近所に買い物をする店がない」が22.1%、「交通手段がない・不十分」が18.2%、「防犯上の不安がある」が15.8%、「近所に外食をする店がない」が13.5%となっている。なお、「特に困っていることはない」が約半数（49.5%）であった。

2) 日常生活での困りごと

日常生活で困っていることについては（複数回答、図13）、「買い物」が22.6%と最も割合が高く、次いで「通院・薬とり」が17.1%、「役所等での手続

図12 地域の困りごと（複数回答）

n=533

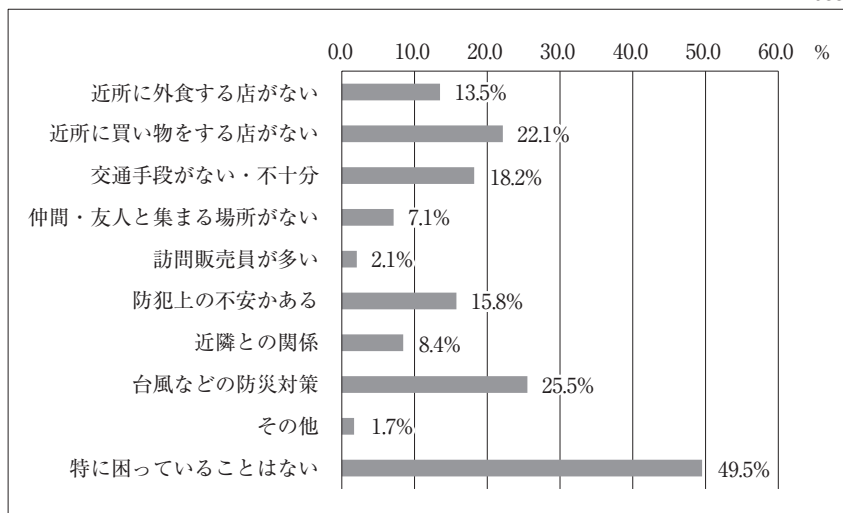
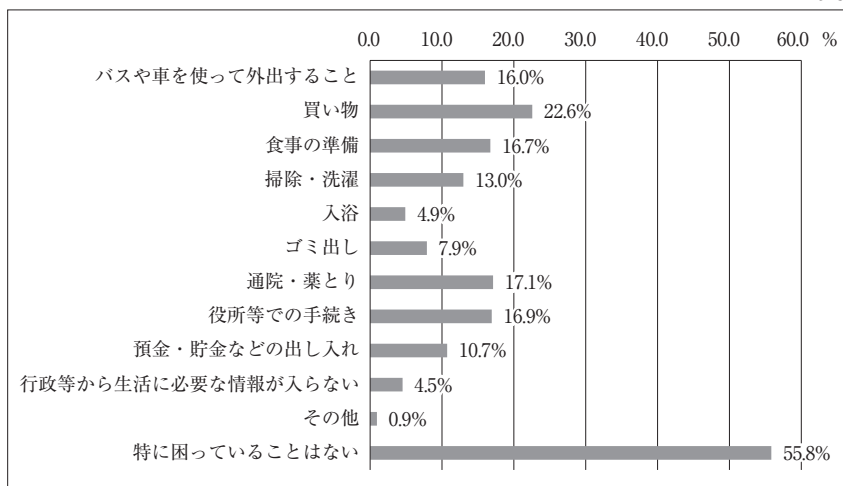


図13 日常生活での困りごと（複数回答）

n=548



き」が16.9%、「食事の準備」が16.7%、「バスや車を使って外出すること」が16.0%となっている。

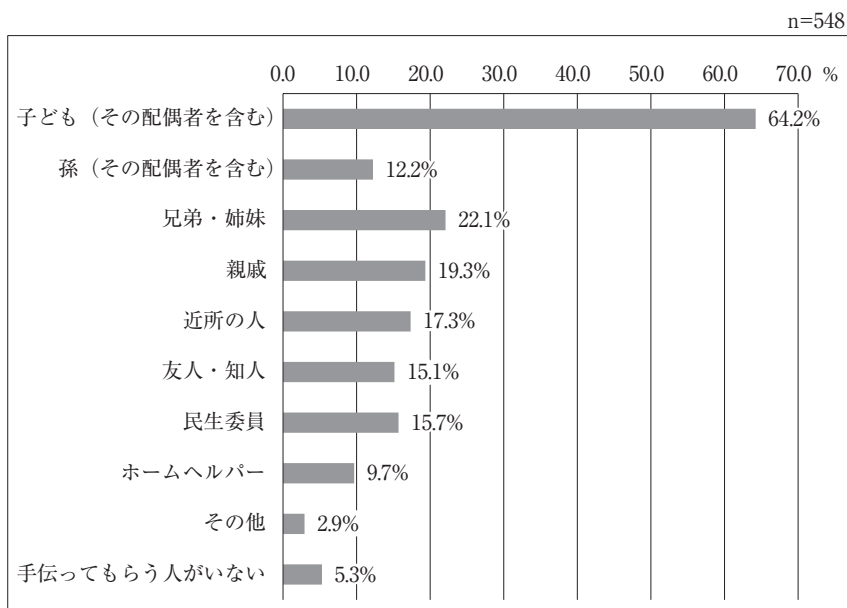
他方、全体の55.8%の人が「特に困っていることはない」と答えている。

3) 困った時の援助者

日常生活で困ったことがあったとき、誰に援助してもらおうかについては（複数回答、図14）子ども（その配偶者を含む）が64.2%と最も高い。次いで「兄弟・姉妹」が22.1%、「親戚」が19.3%、「近所の人」が17.3%となっている。一方、「民生委員」が15.7%、「ホームヘルパー」が9.7%であった。

何か困った時の援助者として「子ども（その配偶者を含む）」が占める割合が約6割半となっており、子どもとの関係が非常に強い。ちなみに、東京都港

図14 困った時の援助者（複数回答）



区でのひとり暮らし高齢者の場合、困った時の援助者として「子ども」と答えた割合は4割程度（39.8%）であり、その差は非常に大きい（『港区におけるひとり暮らし高齢者の生活と意識に関する調査』2012年、港区政策創造研究所、23ページ参照）。

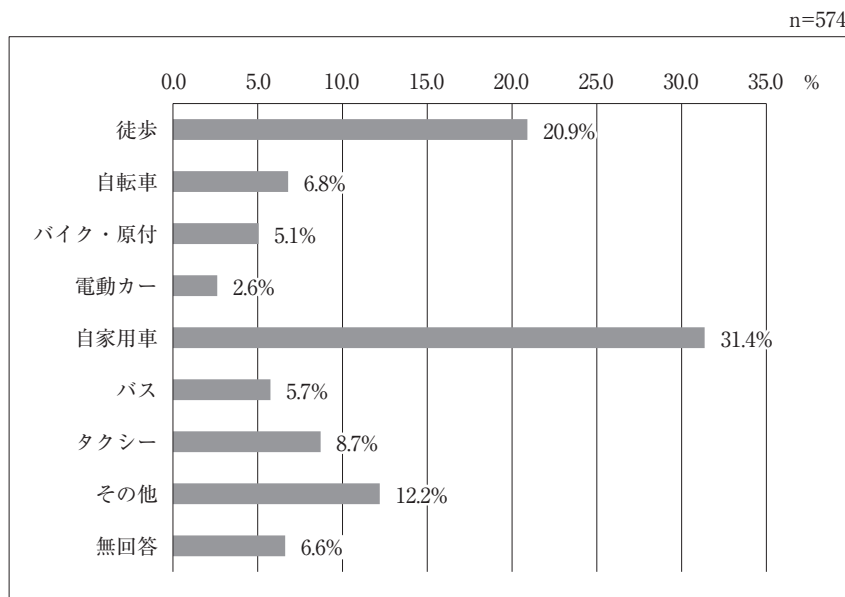
なお、困った時に「手伝ってもらおう人がいない」は5.3%であった。

（6） 外出・社会参加活動について

1) 外出時の交通手段

普段外出する際の主な交通手段を尋ねた。図15のとおり、「自家用車」が31.4%と最も割合が高い。次いで「徒歩」が20.9%、「タクシー」が8.7%、「自転車」が6.8%、「バイク・原付」が5.1%、「バス」が5.7%となっている。

図15 外出時の交通手段



2) 車所持の有無

車を持っているがどうかについては、「持っている」が31.7%、「持っていない」が67.1%、無回答が1.2%となっている。

3) 車運転の可能・不可能

車を運転できるかどうかについては、「運転できる」が33.8%、「運転できない」が65.2%、無回答が1.0%となっている。このように、運転出来る人は3割半弱であった。

4) 外出頻度

外出の頻度を見ると(図16)、「ほとんど毎日」が29.6%と最も高く、「1週間に4,5日くらい」が13.2%、「1週間に2,3日くらい」が24.4%となっている。

他方、「ほとんど外出しない」が12.4%であった。

外出頻度が「1週間に1回くらい」と「ほとんど外出しない」を合わせると29.6%であり、全体の3割程度があまり外出していない。

5) 外出が少ない理由

外出頻度の設問において、その頻度が「1週間に1回くらい」または「ほとんど外出しない」と答えた人に対し、外出が少ない理由を尋ねた(複数回答)。その結果、図17のとおり、「歩行が困難だから」が44.9%と最も高く、次いで「出かける用事がないから」が38.6%、「健康上の心配が大きい」が20.3%となっている。

このように、歩行が困難や健康上の心配を理由に挙げている人が、全体の4割半から2割程度を占めている。他方、「出かけるのがおっくうだから」とか「出かける用事がないから」という理由で外出していない人もいる。これらの人びとに対しては、積極的な外出の機会の提供が求められよう。そうした人が

図16 外出頻度

n=574

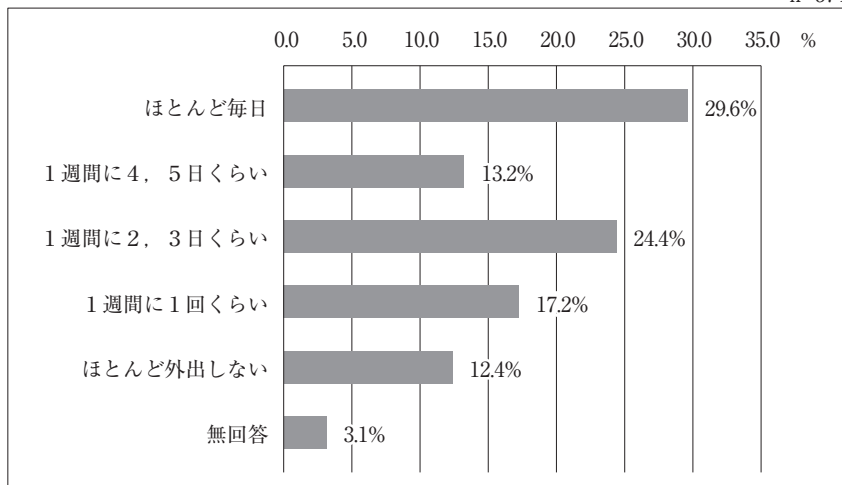
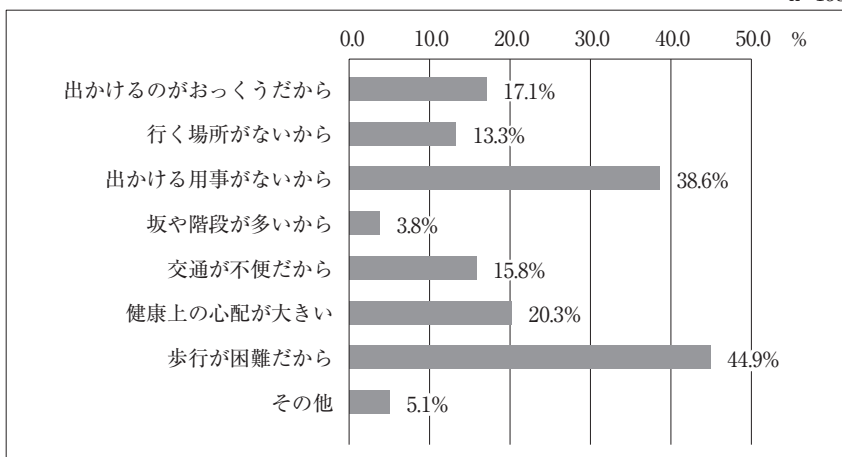


図17 外出が少ない理由 (複数回答)

n=158



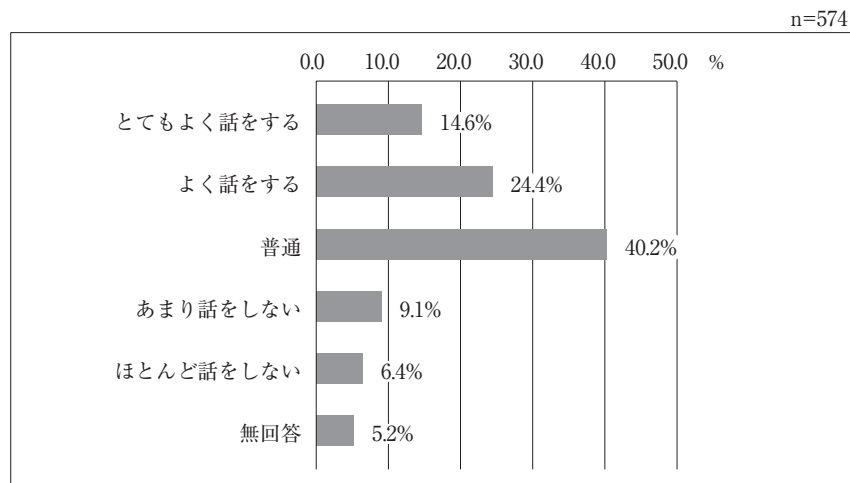
2割から4割程度いることに注目したい。

6) 外出先での会話の程度

外出することは社会的な接触機会として大切であるが、外出先でどの程度会話しているかで、外出の中身が異なると考え、会話の程度を質問項目に入れた。

図18は、その結果である。外出先での会話の程度で「普通」が40.2%で、最も高い割合を示している。「よく話をする」と「とてもよく話をする」を合わせると、39.0%となり、他方、「あまり話をしない」と「ほとんど話をしない」を合わせると15.5%となっている。外出先で会話をあまりしないあるいはほとんどしない人が1割半いるのである。

図18 外出先での会話の程度



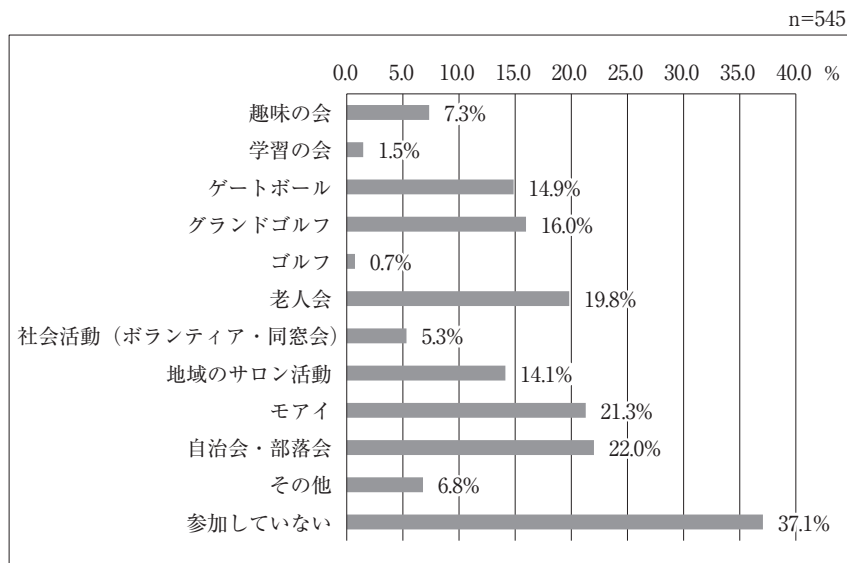
7) 参加している団体・集まり

社会参加活動として、参加している団体・集まりについてみたものが図19である（複数回答）。

「自治会・部落会」が22.0%と最も高く、次いで「モアイ」が21.3%、「老人会」が19.8%となっている。「ゲートボール」、「グランドゴルフ」、「地域のサロン活動」は、1割半前後の参加割合である。

他方、「参加していない」人は全体の4割弱の37.1%を占めている。

図19 参加している団体・集まり（複数回答）



8) 団体・集まりに参加しない理由

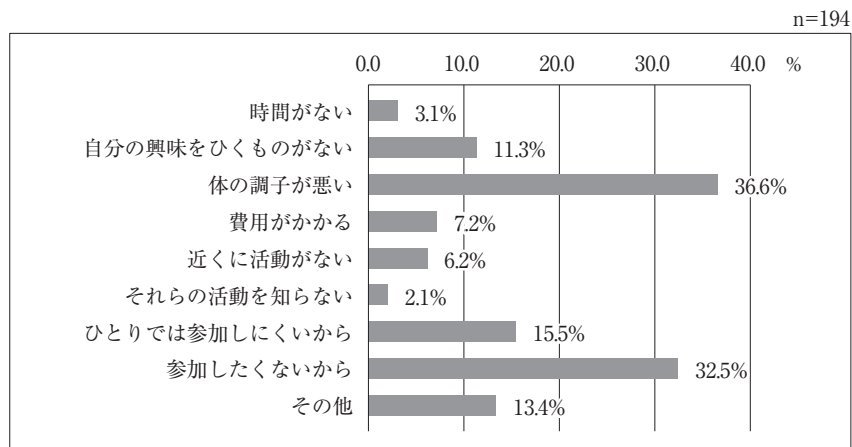
全体の4割弱を占める「団体・集まりに参加していない人」に、参加しない理由を尋ねた（複数回答、図20）。

その結果、「体の調子が悪い」が36.6%と最も割合が高く、次いで「参加したくないから」が32.5%、「ひとりでは参加しにくいから」が15.5%、「自分の興味をひくものがない」が11.3%となっている。

「自分の興味をひくものがない」、「近くに活動がない」、「それらの活動を知

らない」という理由で参加しない人びとが一定割合いるということでは、活動プログラム、広報、プログラムの地域的な適正配置等の課題が見えてくる。

図20 団体・集まりに参加しない理由（複数回答）



(7) 親族・友人について

1) 生存子の有無

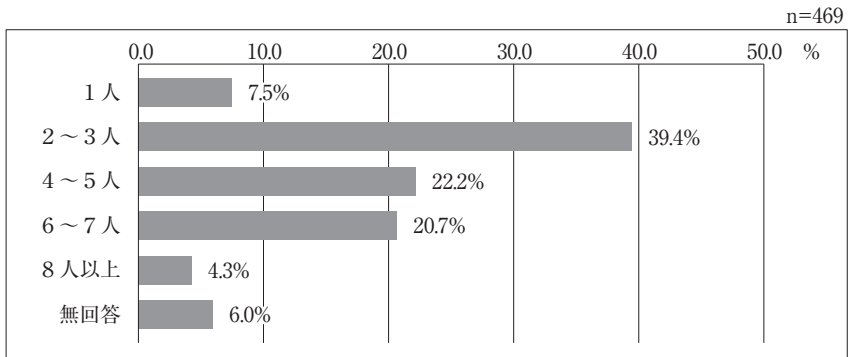
現在、生存している子どもがいるかどうかについては、「生存子がいる」は81.7%と全体の8割を占める。「生存子がない」は13.1%と1割強である（無回答5.2%）。

全体として、子どものいる割合が高いことがわかる。

2) 生存子の人数

生存子の人数を見てみると（図21）、「2～3人」が39.4%と最も割合が高く、次いで「4～5人」が22.2%、「6～7人」が20.7%となっている。「1人」は7.5%、反対に「8人以上」は4.3%であった。

図21 生存子の人数

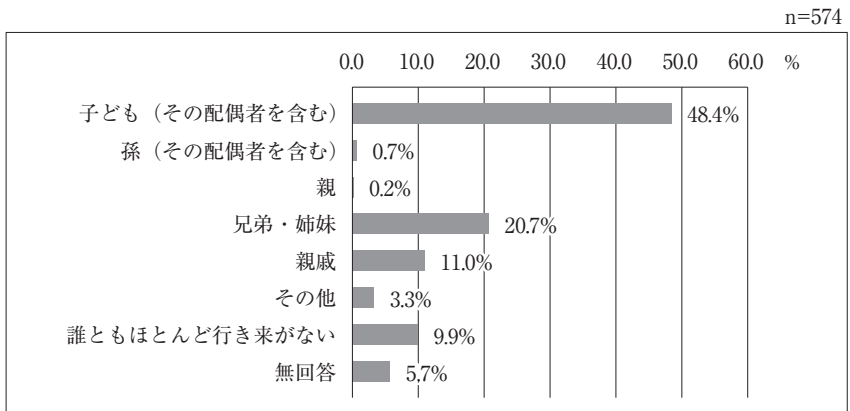


3) 最も行き来する家族・親族

最も行き来する家族・親族については(図22),「子ども(その配偶者を含む)」が48.4%とほぼ半数を占めている。ついで「兄弟・姉妹」が20.7%,「親族」は11.0%となっている。

「誰ともほとんど行き来がない」が9.9%であった。

図22 最も行き来する家族・親族



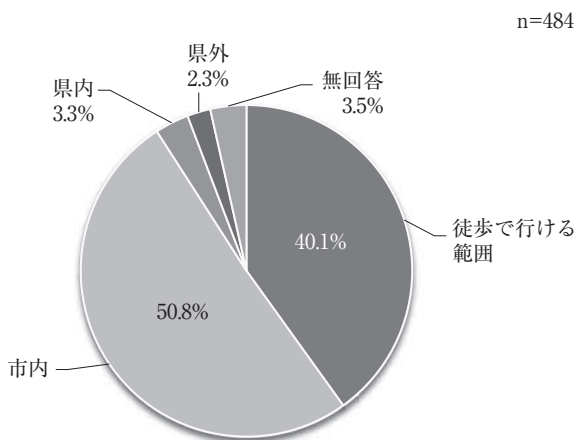
4) 最も行き来する家族・親族の居所

最も行き来する家族・親族がどこに住んでいるかを見ると（図23）、「徒歩で行ける範囲」が40.1%、「市内」が50.8%で、この2つで9割となる。

「県内」が3.3%、「県外」が2.3%であった。

このように家族・親族の9割が市内に住んでいる。

図23 最も行き来する家族・親族の居所

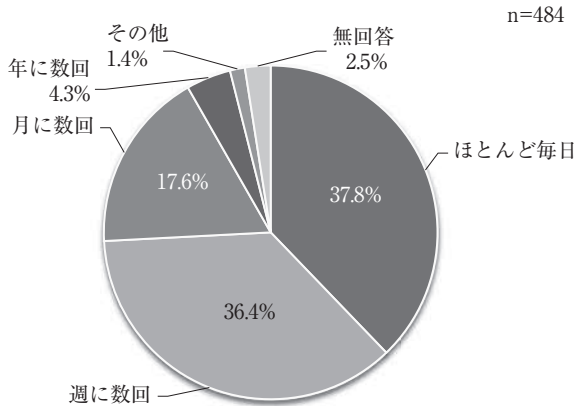


5) 最も行き来する家族・親族との連絡頻度

最も行き来する家族・親族との連絡頻度については（図24）、「ほとんど毎日」が37.8%と最も高く、次いで「週に数回」が36.4%、「月に数回」が17.6%、「年に数回」が4.3%となっている。

このように家族・親族との連絡頻度が週に1回以上と高い人が全体の約7割半（74.2%）となり、連絡頻度は非常に高い。

図24 最も行き来する家族・親族との連絡頻度



6) 親しい友人・知人の有無

日頃親しくしている友人・知人がいるか否かについては、「いる」が83.1%、「いない」が12.7%、無回答4.2%となっている。

7) 親しい友人・知人の種類

親しい友人・知人がいる人に、それが誰かを尋ねた（図25）。「近所の人」が68.3%と全体の約7割を占めている。

その他は割合が少ない。「趣味で知り合った人」が7.1%、「老人クラブの人」が6.5%、「学生時代からの友人」が5.9%、「もとの（今の）職場の人」が4.6%とそれぞれ1割に満たない。

8) 近所づきあいの程度

近所づきあいの程度については（図26）、「ときどき行き来するくらい」が32.1%と最も多く、次いで「互いの家をよく行き来するくらい」が23.7%となっている。この2つを合わせると、55.8%と全体の5割半を占める。反対に、「あ

いさつをかわす程度」(11.0%)と「まったくつきあいがない」(6.6%)を合わせた<近所づきあいがあまりない人>は、17.6%と全体の2割弱を占めるに過ぎない。

図25 親しい友人・知人の種類

n=477

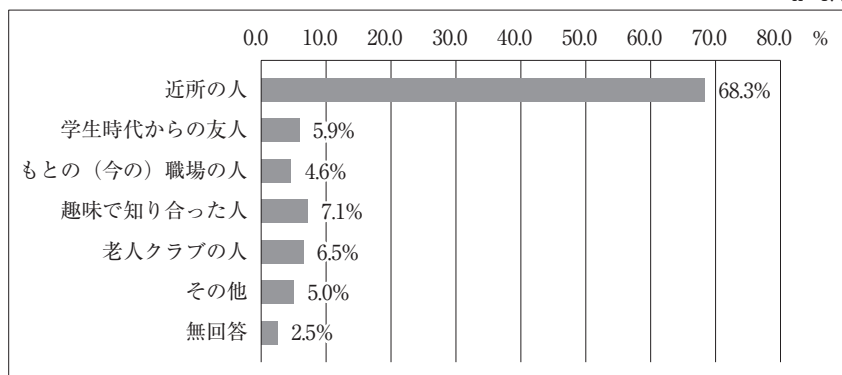
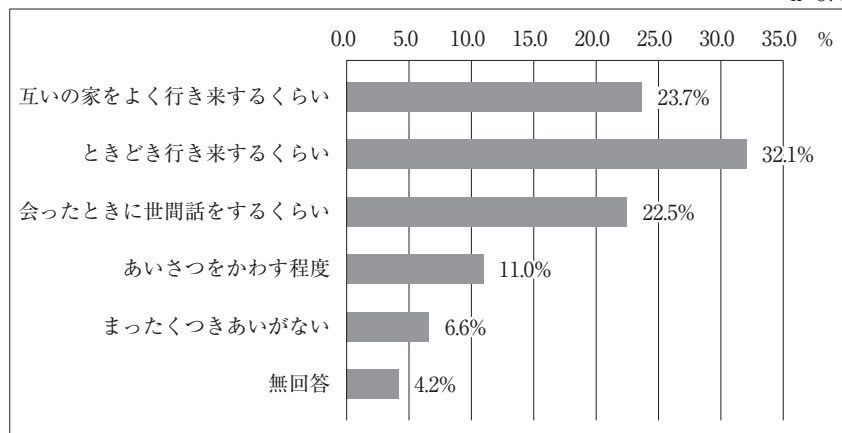


図26 近所づきあいの程度

n=574



9) 近所づきあいの内容

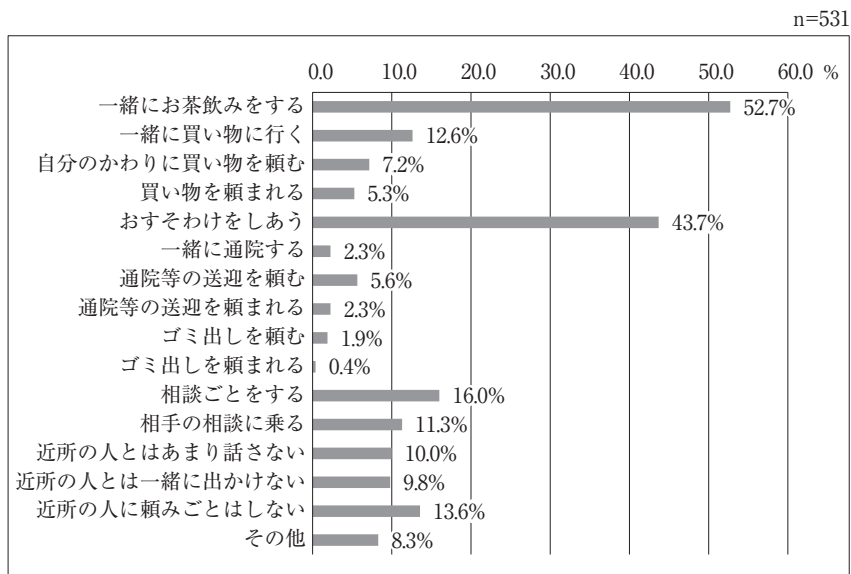
ご近所の方とどのようなつきあいをしているかを尋ねた（複数回答，**図27**）。

「一緒にお茶のみをする」が52.7%と最も多く、次いで「おすそわけをしあう」が43.7%、「相談ごとをする」が16.0%、「一緒に買い物に行く」が12.6%、「相手の相談に乗る」が11.3%となっている。

他方、「近所の人に頼みごとはしない」が13.6%、「近所の人とはあまり話さない」が10.0%、「近所の人とは一緒に出かけない」が9.8%となっている。

「一緒にお茶のみをする」ようなつきあいが全体の半数にもなっていることは注目したい。他方、「近所の人とはあまり話さない」といったつきあいのない人が1割程度いる。

図27 近所づきあいの内容（複数回答）

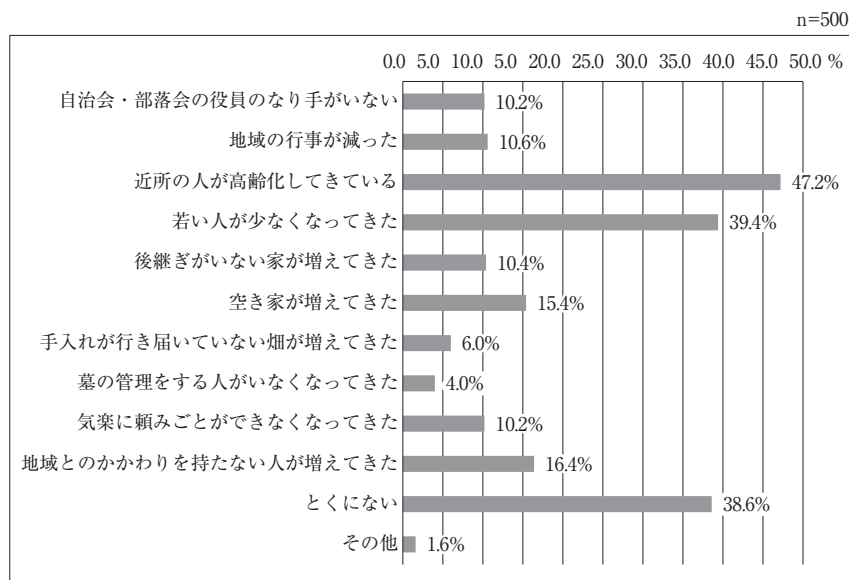


10) 近所の様子で気になること

最近、近所の様子で気になることを尋ねた（複数回答、**図28**）。「近所の人が高齢化してきている」が47.2%と最も割合が高く、次いで「若い人が少なくなってきた」が39.4%、「地域とのかかわりを持たない人が増えてきた」が16.4%、「空き家が増えてきた」が15.4%となっている。

他方、近所の様子で気になることが「とくにない」は38.6%であった。

図28 近所の様子で気になること（複数回答）



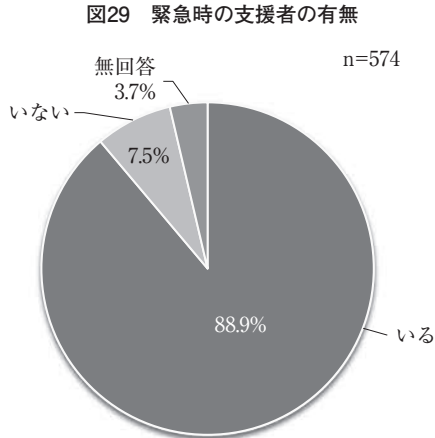
(8) 緊急時の支援者と正月・お盆を過ごした相手

1) 緊急時の支援者の有無

緊急時（病気や身体の不調などの時）にすぐに支援をしてくれる人がいるかどうかについては（**図29**），緊急時の支援者が「いる」が88.9%、「いない」が

7.5%となっている。

ほぼ9割のひとり暮らし高齢者には緊急時の支援者がいると答えている。他方、緊急時にも支援者がいないひとり暮らし高齢者が1割弱いることにも注目したい。



2) 緊急時の主な支援者の種類

緊急時の主な支援者が誰かについては（図30）、「子ども（その配偶者を含む）」が68.6%と7割近くを占める。次いで「兄弟・姉妹」が14.5%、「親戚」が5.5%であった。「近所の人」と「友人・知人」は4%程度となっている。

3) 正月三が日を過ごした相手

正月は親族とのつながりが見える期間である。そこで今年の「正月三が日」を一緒に過ごした相手を尋ねた（複数回答、図31）。

まず「子ども（その配偶者を含む）」が67.7%と最も高い割合となっている。次いで「孫（その配偶者を含む）」が31.2%、「兄弟・姉妹」が26.2%、「親戚」が25.6%である。「近所の人」や「友人・知人」はそれぞれ1割程度であった。

他方、正月三が日を「ひとりで過ごした」人は14.3%であった。

図30 緊急時の主な支援者の種類

n=510

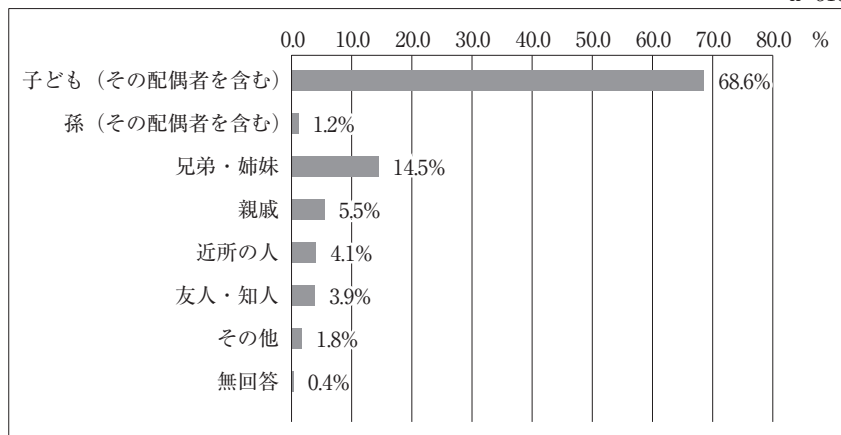
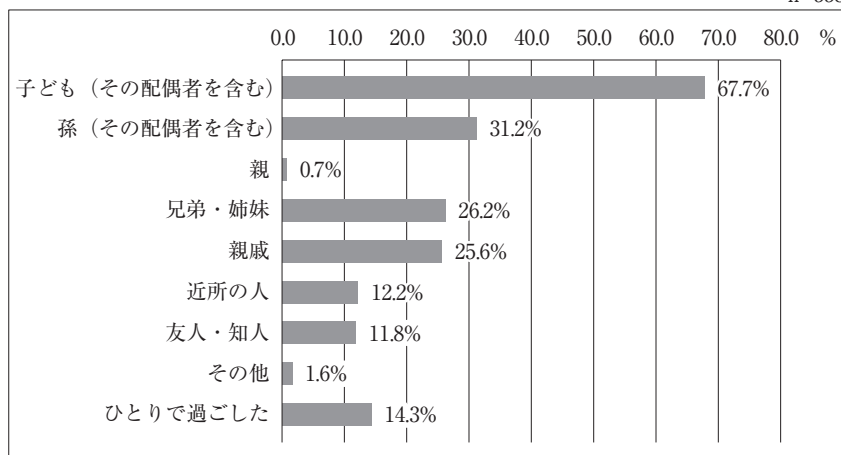


図31 正月三が日を過ごした相手 (複数回答)

n=558



4) お盆を過ごした相手

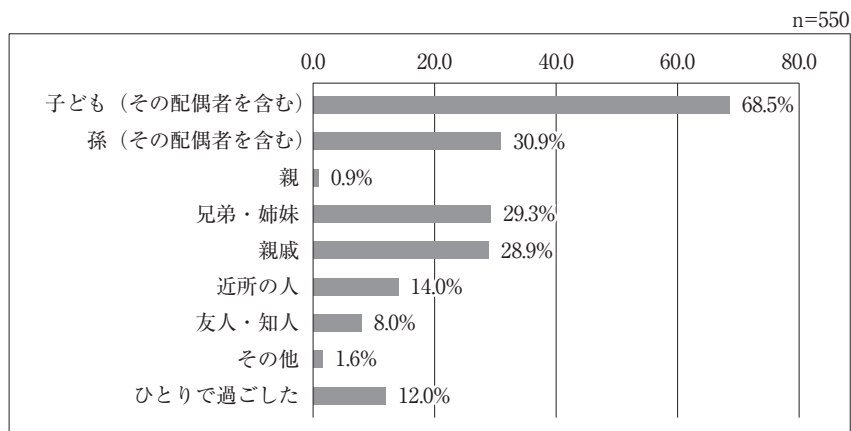
お盆もまた親族とのつながりが深い期間である。昨年のお盆に過ごした相手を尋ねた（複数回答、**図32**）。

ここでもお正月同様、「子ども（その配偶者を含む）」が最も高く、68.5%となっている。

次いで「孫（その配偶者を含む）」が30.9%、「兄弟・姉妹」が29.3%、「親戚」が28.9%であった。その外、「近所の人」が14.0%、「友人・知人」が8.0%である。

お盆を「ひとりで過ごした」人は12.0%である。

図32 お盆を過ごした相手（複数回答）

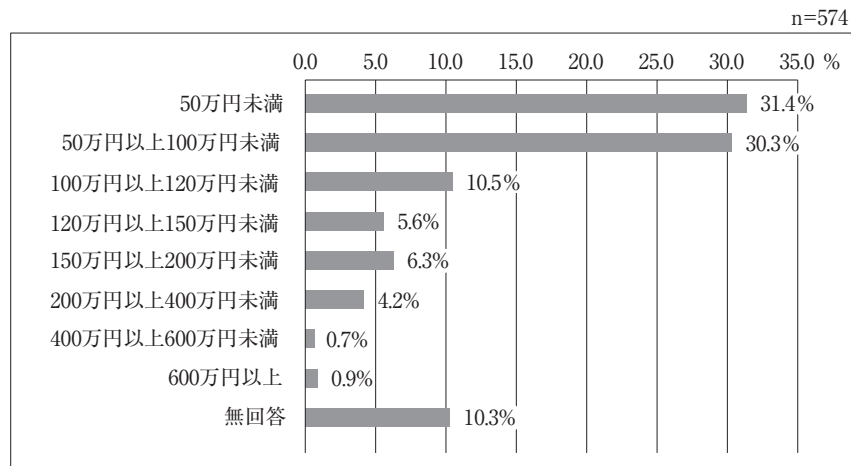


(9) 経済状況

1) 年間収入

1年間の収入合計について見たものが**図33**である。「50万円未満」が31.4%、「50万円以上100万円未満」が30.3%となっている。「100万円以上120万円未満」が10.5%、「120万円以上150万円未満」が5.6%となっている。

図33 年間収入



100万円未満の合計が61.7%と、全体の6割を占める。120万円未満の合計では72.2%となる。さらに150万円未満の合計は77.8%と8割弱が含まれる。

2) 収入の種類

現在の収入の種類については（複数回答、図34）、「年金」が最も高く、91.3%となっている。「仕事による収入」が10.9%、「子どもからの仕送り、援助」が9.8%、「生活保護」が9.1%である。

3) 主な収入

前の収入の種類の中で、主な収入については（図35）、「年金」が最も割合が高く70.7%となっている。次いで「生活保護」が6.8%、「子どもからの仕送り、援助」が2.3%である。「仕事による収入」は4.9%であった。

図34 収入の種類（複数回答）

n = 552

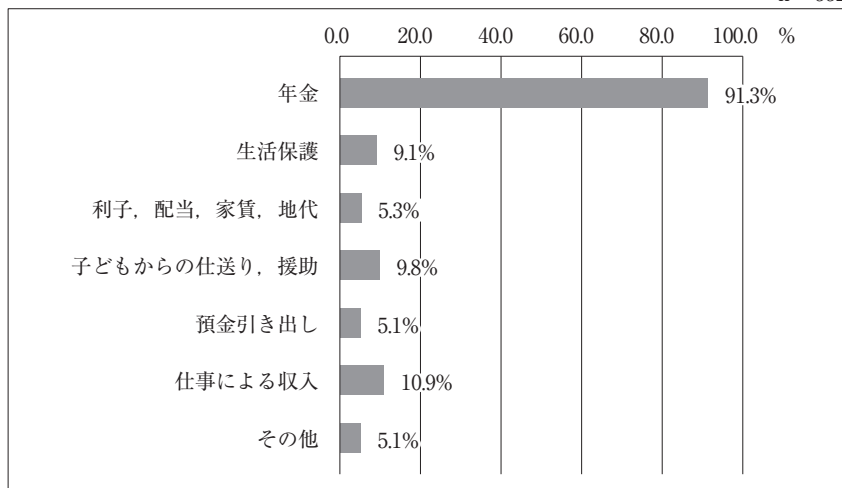
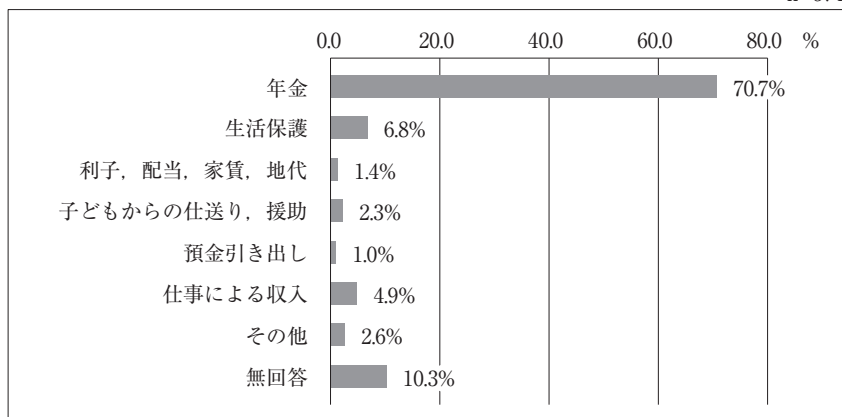


図35 主な収入

n=574



4) 経済状況についての意識

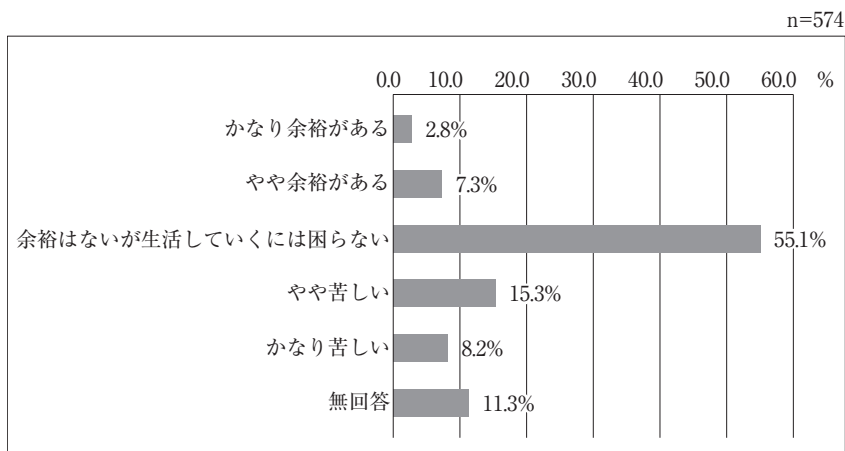
現在の経済状況についての意識を尋ねた（図36）。

「余裕はないが生活していくには困らない」が55.1%と最も割合が高く、次いで「やや苦しい」が15.3%、「かなり苦しい」が8.2%となっている。

一方、「やや余裕がある」が7.3%、「かなり余裕がある」が2.8%であった。

「やや苦しい」と「かなり苦しい」を合わせると、23.5%と4人に1人は生活に苦しさを感じている。余裕がある（「やや余裕がある」＋「かなり余裕がある」）人は10.1%と1割となる。

図36 経済状況についての意識



(10) 生活意識について

次に掲げる生活に関わる10の設問について次の5つの選択肢をおき、それぞれ1つを選んでもらった。

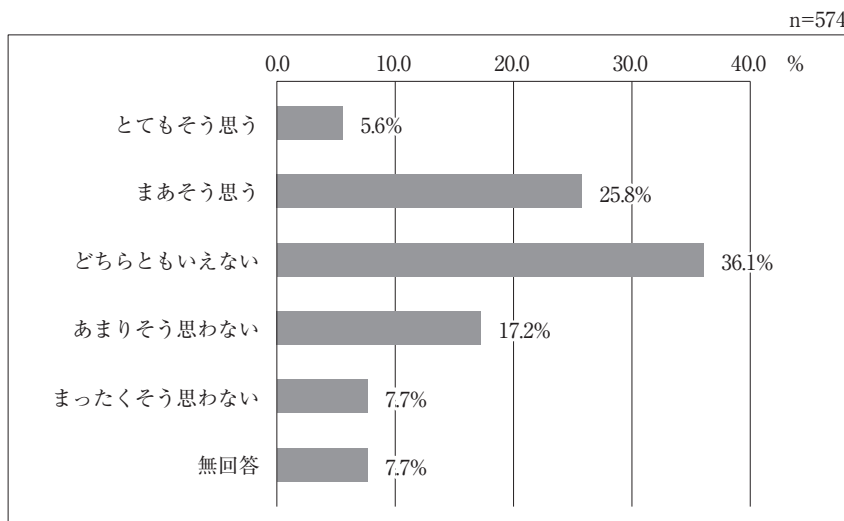
1. 「とてもそう思う」
2. 「まあそう思う」
3. 「どちらともいえない」
4. 「あまりそう思わない」

5. 「まったくそう思わない」

1) 暮らしの張り合いの程度

今の暮らしには張り合いがあるかどうかについては（図37）, 「どちらともいえない」が36.1%を最も割合が高く, 次いで「まあそう思う」が25.8%, 「あまりそう思わない」が17.2%となっている。回答者は張り合いがある方に若干寄っている。

図37 暮らしの張り合いの程度

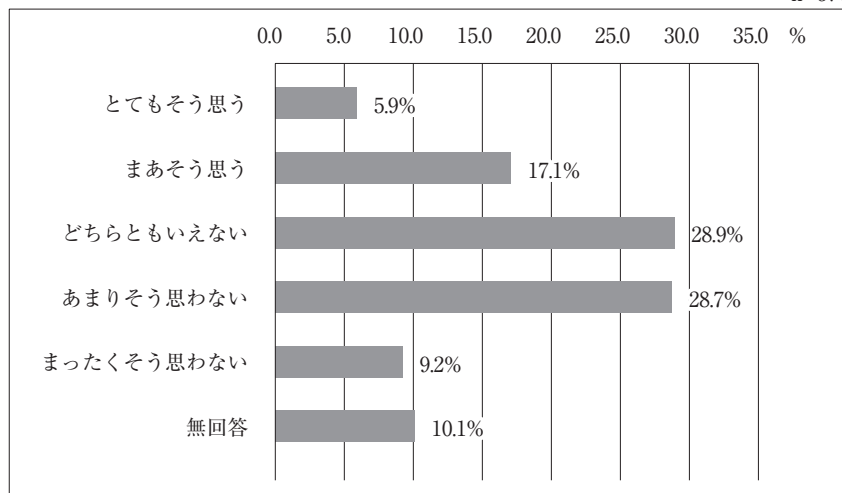


2) 暮らしのストレスの程度

今の暮らしにストレスが多いかどうかについては（図38）, 「どちらともいえない」が28.9%, 「あまりそう思わない」が28.7%, 次いで「まあそう思う」が17.1%, 「まったくそう思わない」が9.2%となっている。回答は今の暮らしにストレスが多いとは思わない方に若干寄っている。

図38 暮らしのストレスの程度

n=574



3) 生活の充実の程度

生活は充実しているかについては（図39）、「どちらともいえない」が35.2%と最も割合が高く、次いで「まあそう思う」が29.1%、「あまりそう思わない」が13.8%となっている。回答は生活が充実している方に寄っている。

4) 生活における不安・心配の程度

生活していて不安や心配があるかについては（図40）、「どちらともいえない」が28.9%と最も割合が高く、次いで「あまりそう思わない」が22.0%、「まあそう思う」が21.3%、「とてもそう思う」が12.2%となっている。回答は不安や心配がある方に寄っている。

図39 生活の充実の程度

n=574

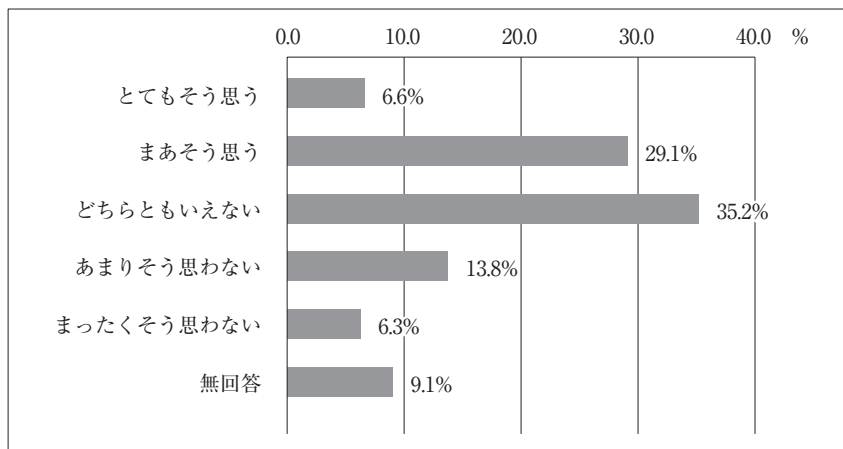
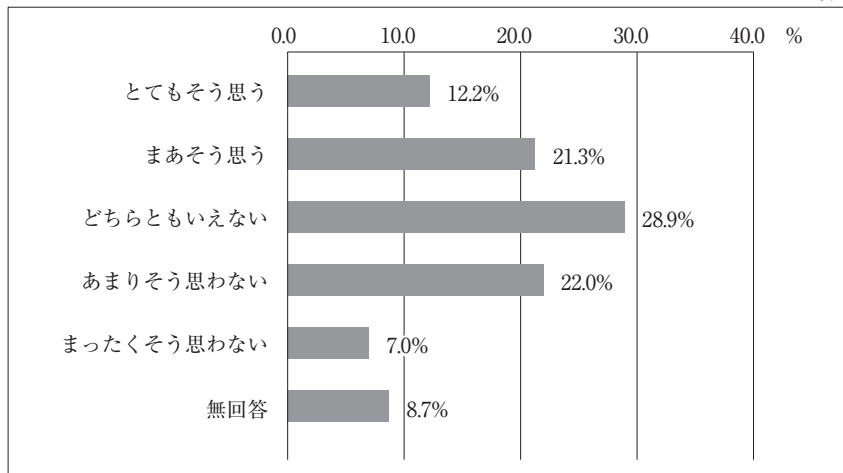


図40 生活における不安・心配の程度

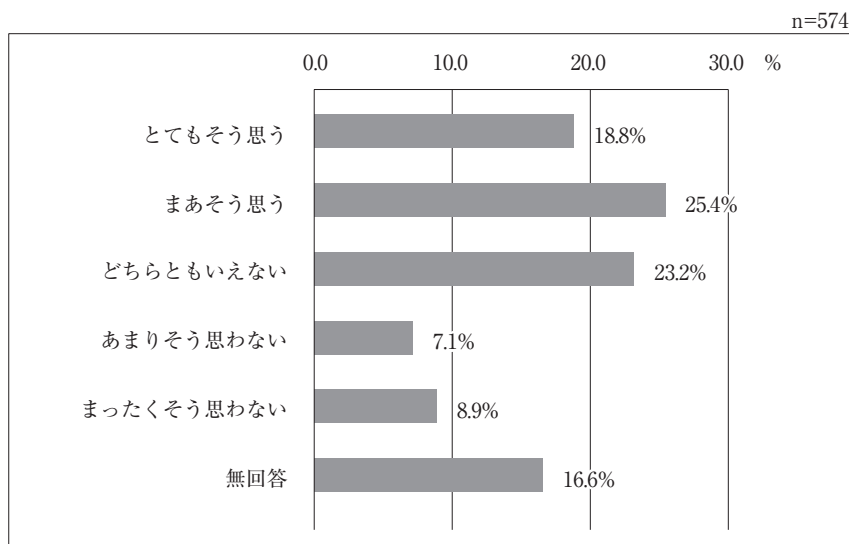
n=574



5) 趣味の時間の満足度

趣味をしている時間は楽しいかどうかについては(図41),「まあそう思う」が25.4%,「どちらともいえない」が23.2%,「とてもそう思う」が18.8%,「まったくそう思わない」が8.9%となっている。回答は趣味の時間が楽しいと思う方に寄っている。

図41 趣味の時間の満足度

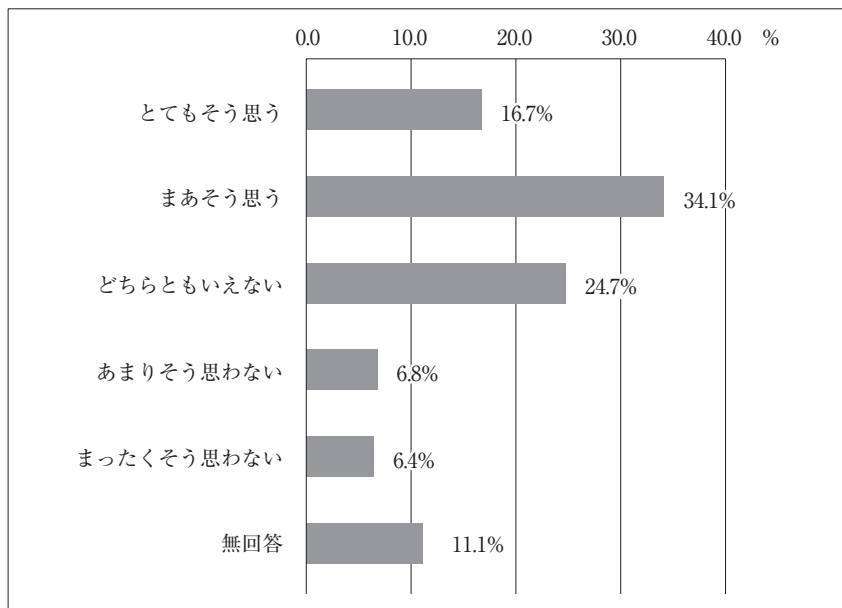


6) 友人関係の満足度

友人との関係に満足しているかについては(図42),「まあそう思う」が34.1%と最も割合が高く,次いで「どちらともいえない」が24.7%,「とてもそう思う」が16.7%となっている。回答は友人との関係に満足していると思う方に寄っている。

図42 友人関係の満足度

n=574



7) 近所づきあいの満足度

近所づきあいに満足しているかについては (図43), 「まあそう思う」が30.3%, 「どちらともいえない」が30.0%, 次いで「とてもそう思う」が13.2%, 「あまりそう思わない」が10.6%となっている。回答は近所づきあいに満足していると思う方に寄っている。

8) 頼りにされていると感じる度合い

自分は頼りにされているかについては (図44), 「どちらともいえない」が32.9%と最も割合が高く, 次いで「まあそう思う」が20.0%, 「あまりそう思わない」が19.2%となっている。回答は自分は頼りにされていると思わない方に

寄っている。

図43 近所づきあいの満足度

n=574

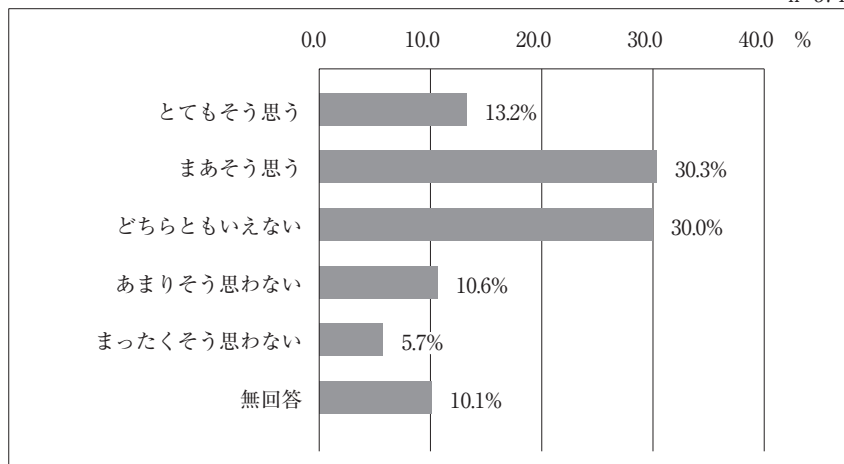
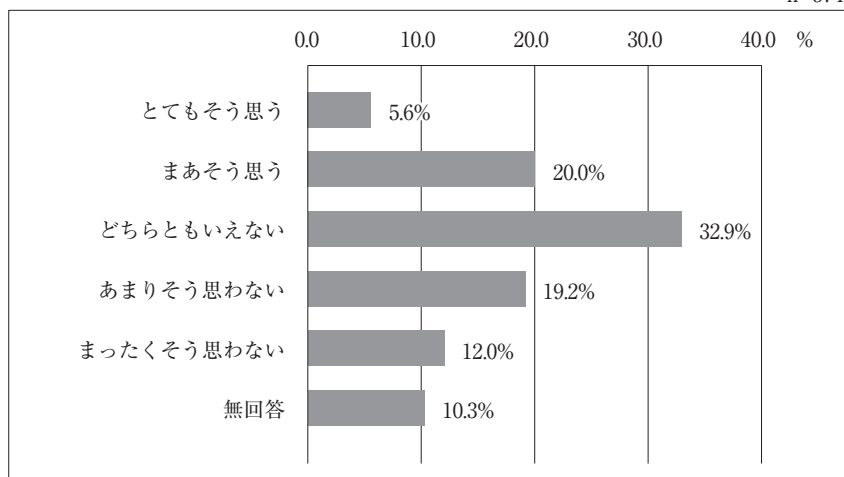


図44 頼りにされていると感じる度合い

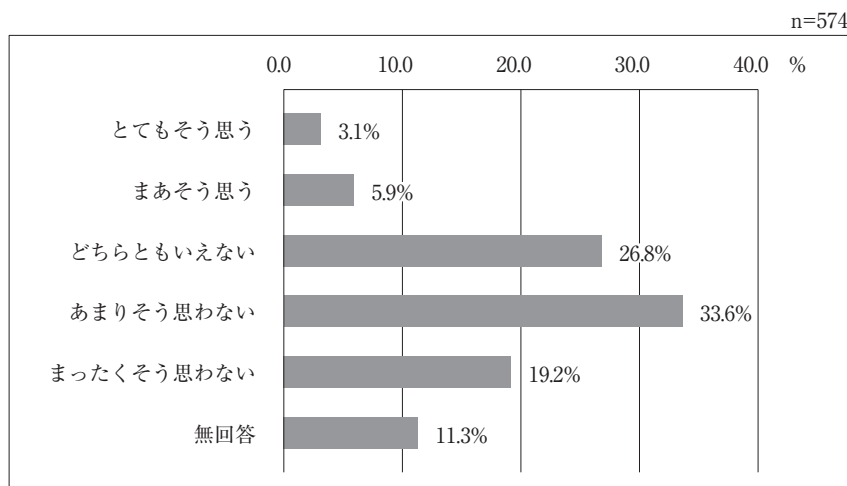
n=574



9) 取り残されていると感じる度合い

周囲から取り残されているように感じるかについては(図45),「あまりそう思わない」が33.6%と最も割合が高く,次いで「どちらともいえない」が26.8%,「まったくそう思わない」が19.2%となっている。回答は周囲から取り残されているとは思わない方に寄っている。

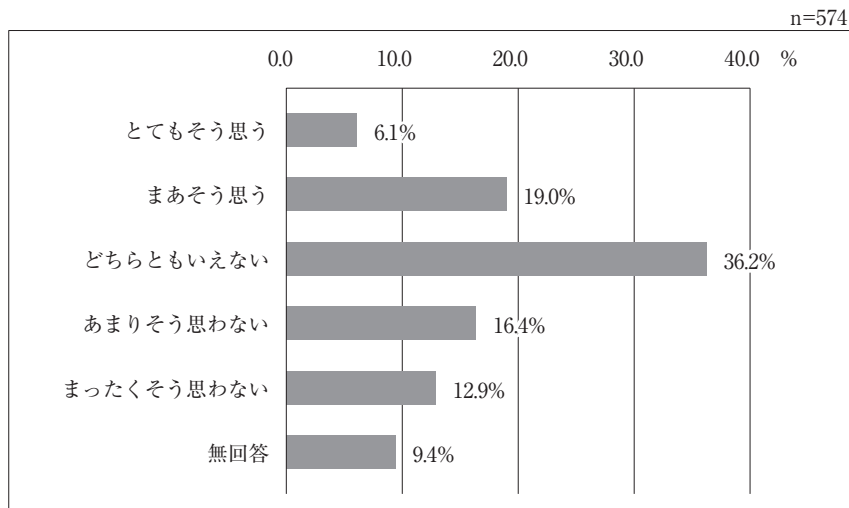
図45 取り残されていると感じる度合い



10) 将来の生活への安心感

将来の生活は安心できるかについては(図46),「どちらともいえない」が36.2%と最も割合が高く,次いで「まあそう思う」が19.0%,「あまりそう思わない」が16.4%,「まったくそう思わない」が12.9%となっている。回答は将来の生活は安心できると思っていない方に寄っている。

図46 将来の生活への安心感



4 結果の若干の分析

以上見てきた宮古島市のひとり暮らし高齢者の一般的特徴を前提に、ここでは、いくつかの設問項目間のクロス集計を行い、さらに詳しい分析をしたい。

(1) 性別

一般にひとり暮らし高齢者は、女性が多いこと、そして男性と女性の間では、項目によっていろいろな違いがある。とりわけ、家族・親族ネットワークや地域ネットワークでは、性別による違いが認められる。まず、性別を基軸に本調査の結果を詳しく見てみよう。

1) 年齢階層

表3は、年齢階層を男女別に集計したものである。男性は、「70歳以上80歳未満」が最も高く41.7%を占め、次いで「80歳以上90歳未満」が35.3%、「65歳以上70歳未満」が17.3%であった。女性は、「80歳以上90歳未満」が最も高く46.4%を占め、次いで「70歳以上80歳未満」が30.8%、「65歳以上70歳未満」は10.5%であった。

つぎに、年齢階層を65歳以上75歳未満の「前期高齢者」と75歳以上の「後期高齢者」の2つに区分し、男女別に集計して見てみよう。表4のとおり、男性は「前期高齢者」が42.3%、「後期高齢者」が57.7%となっている。他方、女性は「前期高齢者」が21.6%、後期高齢者が78.4%であった。後期高齢者は女性が20.7ポイント多い。

以上のように、女性の方が、年齢が高いことがわかる。なお、平均年齢は、男性が77.2歳、女性は80.7歳となっている。

表3 年齢階層×性別

年齢階層	男性		女性		合計	
	実数	%	実数	%	実数	%
65歳以上70歳未満	27	17.3	42	10.5	69	12.4
70歳以上80歳未満	65	41.7	123	30.8	188	33.9
80歳以上90歳未満	55	35.3	185	46.4	240	43.2
90歳以上	9	5.8	49	12.3	58	10.5
合計	156	100.0	399	100.0	555	100.0

※無回答は集計から除く。 $\chi^2=15.790$ 自由度3 $p=0.001^*$ * $p<0.05$

表4 年齢階層（前期・後期別）×性別

年齢階層	男性		女性		合計	
	実数	%	実数	%	実数	%
前期高齢者	66	42.3	86	21.6	152	27.4
後期高齢者	90	57.7	313	78.4	403	72.6
合計	156	100.0	399	100.0	555	100.0

※無回答は集計から除く。 $\chi^2=24.303$ 自由度2 $p=0.000^*$ * $p<0.05$

2) 職業

調査回答者本人のこれまでに最も長く従事した職業、すなわち最長職を男女別に集計して見てみよう。表5のとおり、男女ともに「自営業（農林漁業）」が最も高く、どちらも5割を超えている。

それ以外を見ると、男性の場合、「勤労者（生産現場・技術職）」の割合が高く18.8%、次いで「勤労者（事務職・販売・サービス業）」が7.1%、「公務員」が5.2%となっている。

女性は、「専業主婦」の割合が14.0%、次いで「自営業（商店）」が10.9%、「勤労者（事務職・販売・サービス業）」が6.2%、「公務員」が4.9%となっている。

表5 本人の最長職×性別

最長職	男性		女性		合計	
	実数	%	実数	%	実数	%
自営業（農林漁業）	80	51.9	209	54.1	289	53.5
自営業（商店）	7	4.5	42	10.9	49	9.1
勤労者（事務職・販売・サービス業）	11	7.1	24	6.2	35	6.5
勤労者（生産現場・技術職）	29	18.8	6	1.6	35	6.5
公務員	8	5.2	19	4.9	27	5.0
臨時職・日雇い・パート	2	1.3	16	4.1	18	3.3
その他	12	7.8	16	4.1	28	5.2
専業主婦・専業主夫・無職	5	3.2	54	14.0	59	10.9
合計	154	100	386	100	540	100

※無回答は集計から除く。 $\chi^2=72.953$ 自由度7 $p=0.000^*$ * $p<0.05$

3) 結婚歴の有無

結婚歴の有無を男女別に集計したものが表6である。男性の21.9%が「結婚したことはない」と回答しているが、女性は5.0%である。男性の未婚率が高いことがわかる。その差は、16.9ポイントとなっている。

表6 結婚歴×性別

結婚歴	男性		女性		合計	
	実数	%	実数	%	実数	%
結婚したことがある	121	78.1	379	95.0	500	90.3
結婚したことはない	34	21.9	20	5.0	54	9.7
合計	155	100.0	399	100.0	554	100.0

※無回答は集計から除く。 $\chi^2=36.342$ 自由度 1 $p=0.000^*$ * $p<0.05$

4) 生存子と行き来する家族

生存子の有無を男女別に見ると(表7), 男性は, 生存子が「いない」と回答した人の割合が29.5%, 女性が8.0%となっている。このように男性の約3割は生存している子どもがいないと答えている。

表7 生存子の有無×性別

生存子	男性		女性		合計	
	実数	%	実数	%	実数	%
生存子がいる	105	70.5	357	92.0	462	86.0
生存子がない	44	29.5	31	8.0	75	14.0
合計	149	100.0	388	100.0	537	100.0

※無回答は集計から除く。 $\chi^2=41.572$ 自由度 1 $p=0.000^*$ * $p<0.05$

では, 最も行き来する家族・親族について男女別に集計してみよう。

表8のとおり, 男女とも「子ども(配偶者を含む), 孫, 親」の割合が最も高いが, その割合は, 男性が36.9%であったのに対して, 女性は58.2%と高かった。一方, 「兄弟・姉妹」については, 男性は27.5%であったが, 女性19.7%と低い。「親戚」については, 男性が13.4%, 女性が10.9%とあまり差はない。

「誰ともほとんど行き来がない」と回答した人の割合は, 女性は8.1%であったのに対して, 男性は17.4%と9.3ポイント多い。男性の孤立度が女性より高い

ことがわかる。

表8 最も行き来する家族・親族×性別

最も行き来する家族・親族	男性		女性		合計	
	実数	%	実数	%	実数	%
子ども（配偶者を含む）、孫、親	55	36.9	224	58.2	279	52.2
兄弟・姉妹	41	27.5	76	19.7	117	21.9
親戚	20	13.4	42	10.9	62	11.6
その他	7	4.7	12	3.1	19	3.6
誰ともほとんど行き来がない	26	17.4	31	8.1	57	10.7
合計	149	100.0	385	100.0	534	100.0

※無回答は集計から除く。 $\chi^2=22.494$ 自由度 4 $p=0.000^*$ * $p<0.05$

5) 地域での困りごと

表9は、地域で困っていること（複数回答）について男女別に見たものである。

男性は、「近所に買い物をする店がない」が23.3%で最も高く、次いで「近所に外食する店がない」が16.0%、「台風などの防災対策」が15.3%、「交通手段がない・不十分」が14.0%であった。

女性は、「台風などの防災対策」が最も高く30.0%で、次いで「近所に買い物をする店がない」が21.8%、「交通手段がない・不十分」が20.2%、「防犯上の不安がある」が17.5%、「近所に外食する店がない」が12.5%であった。

以上のように、男女とも、「近所に買い物をする店がない」ことは、共通した困りごとと言える。また、女性は男性に比べて、交通手段や防災対策について困りごとと感じている人が多い。

なお、「特に困っていることはない」と回答した人の割合は、男女とも半数程度で男性が55.3%、女性が46.7%であった。

表9 地域での困りごと（複数回答）×性別

地域での困りごと	男性 (n=150)		女性 (n=377)		合計 (n=527)	
	実数	%	実数	%	実数	%
近所に外食する店がない	24	16.0	47	12.5	71	13.5
近所に買い物をする店がない	35	23.3	82	21.8	117	22.2
交通手段がない・不十分	21	14.0	76	20.2	97	18.4
仲間・友人と集まる場所がない	9	6.0	29	7.7	38	7.2
訪問販売員が多い	0	0.0	11	2.9	11	2.1
防犯上の不安がある	18	12.0	66	17.5	84	15.9
近隣との関係	13	8.7	32	8.5	45	8.5
台風などの防災対策	23	15.3	113	30.0	136	25.8
その他	4	2.7	5	1.3	9	1.7
特に困っていることはない	83	55.3	176	46.7	259	49.1

※無回答は集計から除く。 $\chi^2=27.750$ 自由度 10 $p=0.002^*$ * $p<0.05$

6) 日常生活上の困りごととその支援者

日常生活上の困りごと（複数回答）を男女別に見てみよう（表10）。

男性は、「食事の準備」が21.8%と最も高く、次いで「買い物」が14.3%、「掃除・洗濯」が13.6%、「バスや電車、車を使って外出すること」が10.9%、「役所等での手続き」が10.9%であった。

女性は、「買い物」が最も高く26.1%で、次いで「通院・薬とり」が20.6%、「役所等での手続き」が19.5%、「バスや電車、車を使って外出すること」が18.2%、「食事の準備」が15.0%、「掃除・洗濯」が12.9%、「預金・貯金などの出し入れ」が12.1%であった。

日常生活の上で、男女とも「買い物」は、深刻な困りごとと言える。特に、女性は全般に外出を伴うものを困りごととして挙げている。

なお、「特に困っていることはない」と回答した人の割合は、男性は64.6%、女性は51.7%であった。

次に、こうした日常生活上の困りごとについて、誰に手伝ってもらっている

表10 日常生活上の困りごと（複数回答）×性別

日常生活上の困りごと	男性 (n=147)		女性 (n=379)		合計 (n=526)	
	実数	%	実数	%	実数	%
バスや電車、車を使って外出すること	16	10.9	69	18.2	85	16.2
買い物	21	14.3	99	26.1	120	22.8
食事の準備	32	21.8	57	15.0	89	16.9
掃除・洗濯	20	13.6	49	12.9	69	13.1
入浴	7	4.8	19	5.0	26	4.9
ゴミ出し	12	8.2	30	7.9	42	8.0
通院・薬とり	13	8.8	78	20.6	91	17.3
役所等での手続き	16	10.9	74	19.5	90	17.1
預金・貯金などの出し入れ	11	7.5	46	12.1	57	10.8
行政等から生活に必要な情報が入らない	4	2.7	20	5.3	24	4.6
その他	0	0.0	5	1.3	5	1.0
特に困っていることはない	95	64.6	196	51.7	291	55.3

※無回答は集計から除く。 $\chi^2=44.933$ 自由度 12 $p=0.000^*$ * $p<0.05$

か（複数回答）を男女別に見てみた（表11）。

男女とも「子ども（その配偶者を含む）」が最も割合が高く、次に「兄弟・姉妹」となっているが、その割合は男女によって異なっている。すなわち、男性は「子ども（その配偶者を含む）」と回答した人の割合は45.0%であったが、女性は71.5%にのぼった。「兄弟・姉妹」については、男性は26.2%、女性は20.6%であった。また、女性は「孫（その配偶者を含む）」と回答した人が13.2%で、男性の9.4%に比べて高い。全体として、男性よりも女性の方が、家族や親族に手伝ってもらっていることがわかる。

その外、「近所の人」「友人・知人」「民生委員」については分散し、男性よりも女性の方がやや高い割合を示している。

「手伝ってもらう人がいない」と回答した人の割合は、女性はわずか2.5%であったのに対して、男性は12.8%にもなっている。

表11 日常生活上の困りごとの支援者（複数回答）×性別

日常生活上の困りごとの支援者	男性（n=149）		女性（n=393）		合計（n=542）	
	実数	%	実数	%	実数	%
子ども（その配偶者を含む）	67	45.0	281	71.5	348	64.2
孫（その配偶者を含む）	14	9.4	52	13.2	66	12.2
兄弟・姉妹	39	26.2	81	20.6	120	22.1
親戚	26	17.4	77	19.6	103	19.0
近所の人	21	14.1	71	18.1	92	17.0
友人・知人	21	14.1	61	15.5	82	15.1
民生委員	18	12.1	67	17.0	85	15.7
ホームヘルパー	15	10.1	38	9.7	53	9.8
その他	5	3.4	10	2.5	15	2.8
手伝ってもらえない	19	12.8	10	2.5	29	5.4

※無回答は集計から除く。 $\chi^2=62.756$ 自由度 10 $p=0.000^*$ * $p<0.05$

（2） 地域ネットワーク

地域ネットワークの状況を、近所づきあいの程度・内容から見てみよう。

1) 近所づきあいと性別

近所づきあいの程度は、一般に男性と女性では大きく異なるが、宮古島市ではどうであろうか。男女別に近所づきあいの程度を見たものが表12である。

男性は、「会ったときに世間話をするくらい」が最も高く27.2%，次いで「ときどき行き来するくらい」が26.5%，「あいさつをかわす程度」が18.4%，「まったくつきあいがいい」が15.0%，「互いの家をよく行き来するくらい」が12.9%であった。

女性は、「ときどき行き来するくらい」が最も高く35.4%を占め、次いで「互いの家をよく行き来するくらい」が29.4%，「会ったときに世間話をするくらい」が22.3%，「あいさつをかわす程度」が8.9%，「まったくつきあいがいい」

が4.1%であった。

「互いの家をよく行き来するくらい」と「ときどき行き来するくらい」を合わせて、近所づきあいが親密な人の割合は、男性は39.4%であるのに対して、女性は64.8%と、男性より25.4ポイント多い。一方、「あいさつをかわす程度」と「まったくつきあいが無い」を合わせて、近所づきあいが薄い人の割合は、女性は13.0%であったのに対して、男性は33.4%と高かった。その差は20.4ポイントある。このように、男性は、女性よりも近所づきあいが希薄であることがわかる。

表12 近所づきあいの程度×性別

近所づきあいの程度	男性		女性		合計	
	実数	%	実数	%	実数	%
互いの家をよく行き来するくらい	19	12.9	116	29.4	135	24.9
ときどき行き来するくらい	39	26.5	140	35.4	179	33.0
会ったときに世間話をするくらい	40	27.2	88	22.3	128	23.6
あいさつをかわす程度	27	18.4	35	8.9	62	11.4
まったくつきあいが無い	22	15.0	16	4.1	38	7.0
合計	147	100.0	395	100.0	542	100.0

※無回答は集計から除く。 $\chi^2=41.977$ 自由度4 $p=0.000^*$ * $p<0.05$

次に、表13は、日頃の近所づきあいの内容（複数回答）について、男女別に集計したものである。ただし、この表では「近所づきあいの内容」の選択肢の内、度数5以下を含む項目、「その他」の項目と無回答を除いて集計した。

男性は、「一緒にお茶飲みをする」が42.1%、「おすそわけしあう」が24.0%であった。また、「近所の人とはあまり話さない」が21.5%、「近所の人とは一緒に出かけない」が15.7%、「近所の人に頼みごとはしない」が28.9%と高い割合を示した。

他方、女性は、「一緒にお茶のみをする」が61.2%、「おすそわけをしあう」

が55.1%、「一緒に買い物に行く」は14.9%で、男性に比べて高い割合を示している。一方、「近所の人とはあまり話さない」は7.4%、「近所の人とは一緒に出かけない」は8.8%、「近所の人に頼みごとはしない」は9.9%でいずれも1割に満たなかった。

女性に比べて男性の方が、近所の人とのかかわりが日常的にも薄いことがうかがえる。

表13 主な近所づきあいの内容（複数回答）×性別

主な近所づきあいの内容	男性		女性		合計	
	実数	%	実数	%	実数	%
一緒にお茶飲みをする	51	42.1	222	61.2	273	56.4
一緒に買い物に行く	12	9.9	54	14.9	66	13.6
自分のかわりに買い物を頼む	7	5.8	31	8.5	38	7.9
買い物を頼まれる	6	5.0	21	5.8	27	5.6
おすそわけをしあう	29	24.0	200	55.1	229	47.3
相談ごとをする	20	16.5	64	17.6	84	17.4
相手の相談に乗る	14	11.6	45	12.4	59	12.2
近所の人とはあまり話さない	26	21.5	27	7.4	53	11.0
近所の人とは一緒に出かけない	19	15.7	32	8.8	51	10.5
近所の人に頼みごとはしない	35	28.9	36	9.9	71	14.7
合計	121	100.0	363	100.0	484	100.0

※ $\chi^2=100.842$ 自由度 10 $p=0.000^*$ * $p<0.05$

2) 近所づきあいと親しい友人の有無

表14は、近所づきあいの程度を親しい友人・知人の有無別に見たものである。

親しい友人・知人が「いる」場合には、「互いの家をよく行き来するくらい」が28.7%、「ときどき行き来するくらい」が37.4%で、両者を合わせて近所づきあいが親密な人の割合は66.1%となる。一方、「あいさつをかわす程度」は8.3%、「まったくつきあいが無い」は2.6%であった。両者を合わせて、近所づきあい

が希薄な人の割合は10.9%であった。

他方、親しい友人・知人が「いない」場合には、「互いの家をよく行き来するくらい」は1.4%、「ときどき行き来するくらい」は8.3%で、両者を合わせて近所づきあいが親密な人の割合は9.7%と1割程度であった。一方、「あいさつをかわず程度」は27.8%、「まったくつきあいがない」は36.1%で、両者を合わせて近所づきあいが希薄な人の割合は63.9%となる。

なお、「親しい友人・知人」はその7割が「近所の人」で占められていることを付け加えておこう。

表14 近所づきあいの程度×親しい友人・知人の有無

近所づきあいの程度	親しい友人・知人がいる		親しい友人・知人がいない		合計	
	実数	%	実数	%	実数	%
互いの家をよく行き来するくらい	135	28.7	1	1.4	136	25.1
ときどき行き来するくらい	176	37.4	6	8.3	182	33.6
会ったときに世間話をするくらい	108	23.0	19	26.4	127	23.4
あいさつをかわず程度	39	8.3	20	27.8	59	10.9
まったくつきあいがない	12	2.6	26	36.1	38	7.0
合計	470	100.0	72	100.0	542	100.0

※無回答は集計から除く。 $\chi^2=156.711$ 自由度 4 $p=0.000^*$ * $p<0.05$

(3) 外出と社会参加の状況

1) 性別・年齢による交通手段の違い

①性別による交通手段の違い

外出時の主な交通手段について、男女別に見ると(表15)、男性は49.0%が「自家用車」で、「自転車」が14.6%、「徒歩」が12.6%であった。一方、女性は「自家用車」と回答した人の割合が27.0%で、男性に比べると22ポイントも少ない。次いで割合が高かったのは「徒歩」で26.2%であった。男性では1割半を占め

た「自転車」はわずか4.5%であり、男性では2.6%であった「タクシー」が女性の場合、12.2%にのぼった。このように、男性と女性では、交通手段が異なることがわかる。

表15 外出時の主な交通手段×性別

外出時の主な交通手段	男性		女性		合計	
	実数	%	実数	%	実数	%
徒歩	19	12.6	99	26.2	118	22.3
自転車	22	14.6	17	4.5	39	7.4
バイク・原付	14	9.3	15	4.0	29	5.5
電動カー	5	3.3	10	2.6	15	2.8
自家用車	74	49.0	102	27.0	176	33.3
バス	5	3.3	27	7.1	32	6.0
タクシー	4	2.6	46	12.2	50	9.5
その他	8	5.3	62	16.4	70	13.2
合計	151	100.0	378	100.0	529	100.0

※無回答は集計から除く。 $\chi^2=68.250$ 自由度 7 $p=0.000^*$ * $p<0.05$

同様のことは、通院時の交通手段についてもいえる。表16は、通院時の主な交通手段を男女別に集計したものである。男性は、52.1%が「自分で運転する車（バイク・原付を含む）」と回答し、「自分以外が運転する車」は9.4%、「病院の送迎・巡回バス」は11.5%であった。

他方、女性の場合、最も割合が高かったのは「自分以外が運転する車」で24.1%を占め、次いで「病院の送迎・巡回バス」が21.9%、「自分以外が運転する車」が24.1%、「タクシー」が13.7%であった。

普段の外出時には多かった「徒歩」は、男性は3.1%、女性は5.0%程度で少ない。徒歩圏にない病院に通う際には、男性は自分で運転する車で行く人が半数を超え、女性は、タクシーや病院の送迎車も含めて、「誰かに乗せてもらう」方式で病院に通っている人が6割以上であることがわかる。

表16 通院時の主な交通手段×性別

通院時の主な交通手段	男性		女性		合計	
	実数	%	実数	%	実数	%
自分で運転する車 (バイク・原付を含む)	50	52.1	58	20.9	108	28.9
自分以外が運転する車	9	9.4	67	24.1	76	20.3
バス	6	6.3	21	7.6	27	7.2
タクシー	2	2.1	38	13.7	40	10.7
自転車	9	9.4	1	0.4	10	2.7
徒歩	3	3.1	14	5.0	17	4.5
病院の送迎・巡回バス	11	11.5	61	21.9	72	19.3
その他	6	6.3	18	6.5	24	6.4
合計	96	100.0	278	100.0	374	100.0

※無回答は集計から除く。 $\chi^2=67.168$ 自由度 7 $p=0.000^*$ * $p<0.05$

②年齢による交通手段の違い

年齢階層別に外出時の主な交通手段を見てみよう(表17)。前期高齢者の場合、「自家用車」が59.2%と6割近くを占めている。以下、「自転車」が11.6%、「徒歩」が8.8%、「バス」が6.1%、「タクシー」が4.1%であった。後期高齢者の場合には、「徒歩」が27.3%と最も高く、「自家用車」は23.9%であった。それ以外としては「自転車」が5.8%、「タクシー」が11.7%であった。「バス」は、

表17 外出時の主な交通手段×年齢階層

外出時の主な交通手段	前期高齢者		後期高齢者		合計	
	実数	%	実数	%	実数	%
徒歩	13	8.8	103	27.3	116	22.1
自転車	17	11.6	22	5.8	39	7.4
バイク・原付	11	7.5	17	4.5	28	5.3
電動カー	0	0.0	13	3.4	13	2.5
自家用車	87	59.2	90	23.9	177	33.8
バス	9	6.1	24	6.4	33	6.3
タクシー	6	4.1	44	11.7	50	9.5
その他	4	2.7	64	17.0	68	13.0
合計	147	100.0	377	100.0	524	100.0

※無回答は集計から除く。 $\chi^2=89.789$ 自由度 7 $p=0.000^*$ * $p<0.05$

前期高齢者とあまり変わらず、6.4%であった。年齢階層により、主な交通手段が異なってくる。

③車の運転と性別・年齢

自家用車については、所有しているかどうかについても男女により割合が異なる。表18のとおり、男性の51.3%が「持っている」のに対して、女性の場合は「持っている」と回答した人は24.3%である。

運転のできるか否かについては（表19）、「運転できる」と回答した人の割合が、男性では55.4%であったのに対して、女性は25.6%であった。

表18 自家用車の所有×性別

	男性		女性		合計	
	実数	%	実数	%	実数	%
自家用車を持っている	80	51.3	98	24.3	178	31.8
自家用車を持っていない	76	48.7	305	75.7	381	68.2
合計	156	100.0	403	100.0	559	100.0

※無回答は集計から除く。 $\chi^2=37.677$ 自由度 1 $p=0.000^*$ * $p<0.05$

表19 車の運転×性別

	男性		女性		合計	
	実数	%	実数	%	実数	%
車を運転できる	87	55.4	103	25.6	190	33.9
車を運転できない	70	44.6	300	74.4	370	66.1
合計	157	100.0	403	100.0	560	100.0

※無回答は集計から除く。 $\chi^2=44.925$ 自由度 1 $p=0.000^*$ * $p<0.05$

2) 外出頻度と年齢

外出頻度を年齢階層別に見てみよう。表20は年齢を前期高齢者と後期高齢

者の2つに区分したものと、外出頻度をクロス集計したものである。

前期高齢者の外出頻度は、「ほとんど毎日」が39.6%、「1週間に4、5日くらい」が17.4%で、両者を合わせて、よく外出する人の割合は57.0%であった。「1週間に1回くらい」(10.1%)と「ほとんど外出しない」(4.0%)を合わせて、外出頻度の少ない人は、14.1%であった。後期高齢者の場合、「ほとんど毎日」外出する人の割合は27.3%、「1週間に4、5日くらい」は11.9%で、両者を合わせて、よく外出する人の割合は39.2%と、前期高齢者に比べて低くなっている。「1週間に1回くらい」は20.5%、「ほとんど外出しない」は16.2%と高くなっており、両者を合わせて、外出頻度の少ない人の割合は36.7%であった。

表20 外出頻度×年齢階層

外出頻度	前期高齢者		後期高齢者		合計	
	実数	%	実数	%	実数	%
ほとんど毎日	59	39.6	108	27.3	167	30.7
1週間に4、5日くらい	26	17.4	47	11.9	73	13.4
1週間に2、3日くらい	43	28.9	95	24.1	138	25.4
1週間に1回くらい	15	10.1	81	20.5	96	17.6
ほとんど外出しない	6	4.0	64	16.2	70	12.9
合計	149	100.0	395	100.0	544	100.0

※無回答は集計から除く。 $\chi^2=27.909$ 自由度 4 $p=0.000^*$ * $p<0.05$

3) 外出時の会話の状況

外出時にどの程度会話をするかについて、男女別に見ると(表21)、男性は、「普通」が46.9%で最も高く、次いで「よく話をする」と「あまり話をしない」がそれぞれ15.6%ずつ、「ほとんど話をしない」が12.2%、「とてもよく話をする」が9.5%であった。「とてもよく話をする」と「よく話をする」を合わせて、外出時によく話をする人は25.1%、全体の4分の1となる。他方、「あまり話をしない」と「ほとんど話をしない」を合わせると27.8%と、約3割弱の人が外出しても話をしない。

他方、女性は、「普通」と回答した人の割合が40.6%で最も高く、次いで「よく話をする」が29.3%、「とてもよく話をする」が17.9%、「あまり話をしない」は7.4%、「ほとんど話をしない」は4.8%であった。「とてもよく話をする」と「よく話をする」を合わせて、外出時によく話をする人は47.2%と、半数弱を占める。「あまり話をしない」と「ほとんど話をしない」を合わせて、外出時に話をしない人の割合は12.2%であった。

全体に、男性に比べて女性の方が外出時によく会話をすることがわかる。

表21 外出時の会話の程度×性別

外出時の会話の程度	男性		女性		合計	
	実数	%	実数	%	実数	%
とてもよく話をする	14	9.5	70	17.9	84	15.6
よく話をする	23	15.6	115	29.3	138	25.6
普通	69	46.9	159	40.6	228	42.3
あまり話をしない	23	15.6	29	7.4	52	9.6
ほとんど話をしない	18	12.2	19	4.8	37	6.9
合計	147	100.0	392	100.0	539	100.0

※無回答は集計から除く。 $\chi^2=29.681$ 自由度 4 $p=0.000^*$ * $p<0.05$

4) 外出と社会参加

①社会参加と外出頻度

社会との一つの接点として、地域の社会活動への参加は重要なものである。すでに見てきたように、社会活動に参加していない人の割合は37.1%であった。

表22は、社会活動への参加の有無別に、外出頻度を集計したものである。社会活動に「参加している」場合には、37.0%が「ほとんど毎日」外出し、「1週間に4、5日くらい」の人は17.2%で、外出頻度の高い人の割合が、54.2%と半分以上を占めた。一方、社会活動に「参加していない」人の場合、外出頻度が「1週間に1回くらい」の人が24.0%、「ほとんど外出しない」人が26.0%となっており、社会活動に「参加していない」人の半数は外出頻度が少ない。

表22 外出頻度×社会活動への参加有無

外出頻度	社会活動に参加している		社会活動に参加していない		合計	
	実数	%	実数	%	実数	%
ほとんど毎日	125	37.0	38	19.0	163	30.3
1週間に4,5日くらい	58	17.2	16	8.0	74	13.8
1週間に2,3日くらい	90	26.6	46	23.0	136	25.3
1週間に1回くらい	49	14.5	48	24.0	97	18.0
ほとんど外出しない	16	4.7	52	26.0	68	12.6
合計	338	100.0	200	100.0	538	100.0

※無回答は集計から除く。 $\chi^2=72.982$ 自由度 4 $p=0.000^*$ * $p<0.05$

②社会参加と健康状態

ところで、社会活動に参加しない人は全体の36.6%となっているが、参加しない理由としては、「健康上の理由」を挙げる人は多い。表23のとおり、社会活動に参加していない人のうち、健康状態が良くない人の割合は、「あまり健康でない」(31.3%)と「健康ではない」(20.2%)を合わせて51.5%と5割を超えている。健康状態が良くない場合には、社会活動への参加が制限され、さらには外出頻度の少なさにつながっていると言えよう。

表23 健康状態×社会活動への参加有無

健康状態	社会活動に参加している		社会活動に参加していない		合計	
	実数	%	実数	%	実数	%
非常に健康である	38	11.3	14	7.1	52	9.8
まあまあ健康である	93	27.8	35	17.7	128	24.0
普通	114	34.0	47	23.7	161	30.2
あまり健康でない	74	22.1	62	31.3	136	25.5
健康ではない	16	4.8	40	20.2	56	10.5
合計	335	100.0	198	100.0	533	100.0

※無回答は集計から除く。 $\chi^2=44.297$ 自由度 4 $p=0.000^*$ * $p<0.05$

(4) 緊急時の支援者がいない人の特徴

親族・地域ネットワークの欠如している状態を端的に示す指標として、筆者は、多くの調査の中で、体調を崩して寝込んだ時などの緊急時に誰も支援者がいない状態を設定してきた。この「緊急時に支援者がいない人」の割合は、親族・地域ネットワークの欠如状態にある人々、すなわち孤立している人々の量を測定することでもあるが、この値は、我々としては少なめのものと考えている。とはいえ、この人々は明らかに親族・地域ネットワークが欠如しており、孤立していると言ってよいであろう。

宮古島市での緊急時の支援者がいない人の特徴を見てみよう。

1) 緊急時の支援者の有無と性別・年齢

表24は、緊急時の支援者の有無を男女別に集計したものである。全体として緊急時の支援者がいない人は7.9%であった。緊急時の支援者の有無別に性別の特徴をみてみよう。

緊急時の支援者が「いる」場合、男性が25.0%、女性が75.0%で、回答者全体の性別の構成割合（男性27.3%、女性72.7%）とほとんど変わらない。しかし、緊急時の支援者が「いない」場合には、男性の割合は53.5%にのぼり、女性は46.5%になる。緊急時の支援者がいない人の半分が男性であり、男性の15.4%が緊急時の支援者がいない計算になる。なお、女性のうち、緊急時の支援者がいない人の割合は5.0%である。

次に、年齢階層を前期高齢者と後期高齢者の2つに区分し、緊急時の支援者の有無別に集計した（表25）。緊急時の支援者が「いる」場合には、前期高齢者が25.3%、後期高齢者が74.7%であるが、支援者が「いない」場合には、前期高齢者が56.1%を占め、後期高齢者は43.9%である。前期高齢者のうちの15.3%が緊急時の支援者がいない。後期高齢者のうち、緊急時の支援者がいな

い人の割合は4.6%である。

表24 性別×緊急時支援者の有無

性別	緊急時支援者がいる			緊急時支援者が いない			合計		
	実数	列%	行%	実数	列%	行%	実数	列%	行%
男性	126	25.0	84.6	23	53.5	15.4	149	27.3	100.0
女性	377	75.0	95.0	20	46.5	5.0	397	72.7	100.0
合計	503	100.0	92.1	43	100.0	7.9	546	100.0	100.0

※無回答は集計から除く。 $\chi^2=16.146$ 自由度 1 $p=0.000^*$ * $p<0.05$

表25 年齢階層（2区分）×緊急時支援者の有無

年齢階層（2区分）	緊急時支援者がいる			緊急時支援者が いない			合計		
	実数	列%	行%	実数	列%	行%	実数	列%	行%
前期高齢者	127	25.3	84.7	23	56.1	15.3	150	27.6	100.0
後期高齢者	375	74.7	95.4	18	43.9	4.6	393	72.4	100.0
合計	502	100.0	92.4	41	100.0	7.6	543	100.0	100.0

※無回答は集計から除く。 $\chi^2=17.983$ 自由度 1 $p=0.000^*$ * $p<0.05$

表26は、さらに、男女それぞれにおいて、年齢階層別に緊急時の支援者の有無を集計したものである。男性の後期高齢者、女性の前期高齢者と後期高齢者は、緊急時の支援者が「いない」人の割合がそれぞれ8.3%、9.4%、3.6%と低い。しかし、前期高齢期の男性については、支援者が「いない」人の割合が23.8%にもものぼった。

表26 緊急時の支援者の有無×性別×年齢階層（2区分）

緊急時の支援者の有無	男性				女性			
	前期高齢者		後期高齢者		前期高齢者		後期高齢者	
	実数	%	実数	%	実数	%	実数	%
緊急時支援者がいる	48	76.2	77	91.7	77	90.6	294	96.4
緊急時支援者がいない	15	23.8	7	8.3	8	9.4	11	3.6
合計	63	100.0	84	100.0	85	100.0	305	100.0

※無回答は集計から除く。男性： $\chi^2=6.775$ 自由度 1 $p=0.000^*$ * $p<0.05$

2) 緊急時の支援者の有無と家族・親族

①緊急時の支援者の有無と生存子の有無

緊急時の支援者は子ども（その配偶者を含む）が6割を占めている。そこで、緊急時の支援者の有無別に、生存子の有無を見てみると（表27）、緊急時の支援者が「いる」場合には、生存子が「いる」人の割合が89.8%にのぼるが、支援者が「いない」場合には、生存子が「いる」人の割合が50.0%と低くなっている。

表27 生存子の有無×緊急時支援者の有無

生存子の有無	緊急時支援者がいる		緊急時支援者がいない		合計	
	実数	%	実数	%	実数	%
生存子がいる	440	89.8	20	50.0	460	86.8
生存子はいない	50	10.2	20	50.0	70	13.2
合計	490	100.0	40	100.0	530	100.0

※無回答は集計から除く。 $\chi^2=51.092$ 自由度 1 $p=0.000^*$ * $p<0.05$

②緊急時の支援者の有無と正月三が日の過ごし方

家族や親族と過ごすことが多い正月三が日についても、緊急時の支援者が「いない」場合には、「ひとりで過ごした」人が56.1%と半分を超えている（表28）。緊急時の支援者が「いない」人は家族や親族とのつながりが弱いことをうかがわせる。

表28 正月三が日の過ごし方×緊急時支援者の有無

正月三が日の過ごし方	緊急時支援者がいる		緊急時支援者がいない		合計	
	実数	%	実数	%	実数	%
正月三が日をだれかと過ごした	450	89.5	18	43.9	468	86.0
正月三が日をひとりで過ごした	53	10.5	23	56.1	76	14.0
合計	503	100.0	41	100.0	544	100.0

※無回答は集計から除く。 $\chi^2=65.475$ 自由度 1 $p=0.000^*$ * $p<0.05$

3) 緊急時の支援者の有無と日常生活上の支援者

次に、日常生活上で困った時、誰に支援を求めているかについて、緊急時の支援者の有無別に集計した(表29)。緊急時の支援者がいる場合には、日常生活上の支援者は「子ども(その配偶者を含む)」が69.5%、「兄弟・姉妹」が23.4%、「親戚」が20.3%、「孫(その配偶者を含む)」が13.4%で、家族や親族を中心に支援を頼んでいることがわかる。「手伝ってもらう人がいない」と回答した人はわずか2.0%(10人)であった。

一方、緊急時の支援者が「いない」場合には、「子ども(その配偶者を含む)」が14.6%と比較的高いものの、緊急時の支援者が「いる」グループと比べて低い割合にとどまり、「兄弟・姉妹」は4.9%、「親戚」は7.3%といずれも低い割合であった。その代わり、「ヘルパー」が22.0%と高くなっている。「手伝ってもらう人がいない」人の割合は41.5%にもものぼった。

以上のように、緊急時の支援者がいない人は、家族・親族との行き来が少ない人が多く、その背景には、支援を頼むべき子どもがいない人の割合が高いと

表29 日常生活上の支援者(複数回答)×緊急時支援者の有無

日常生活上の支援者	緊急時支援者がいる (n=492)		緊急時支援者がいない (n=41)		合計 (n=533)	
	実数	%	実数	%	実数	%
子ども(その配偶者を含む)	342	69.5	6	14.6	348	65.3
孫(その配偶者を含む)	66	13.4	0	0.0	66	12.4
兄弟・姉妹	115	23.4	2	4.9	117	22.0
親戚	100	20.3	3	7.3	103	19.3
近所の人	90	18.3	3	7.3	93	17.4
友人・知人	77	15.7	4	9.8	81	15.2
民生委員	78	15.9	6	14.6	84	15.8
ホームヘルパー	39	7.9	9	22.0	48	9.0
その他	14	2.8	2	4.9	16	3.0
手伝ってもらう人がいない	10	2.0	17	41.5	27	5.1

※無回答は集計から除く。 $\chi^2=204.444$ 自由度 10 $p=0.000^*$ * $p<0.05$

ということがある。では、その分、近所の人や友人・知人に支援を頼むことがあるのだろうか。

「近所の人」に困った時の支援を依頼する人の割合は、緊急時の支援者が「いない」場合7.3%で、緊急時の支援者が「いる」グループの18.3%に比べて低い値であった。「友人・知人」についても、緊急時の支援者が「いる」グループでは15.7%であったのに対して、「いない」グループでは9.8%と低かった。緊急時の支援者がいない人は、日常的な支援についても、家族・親族はもとより、近隣住民にも頼っていないことがわかる。

なお、緊急時の支援者が「いる」場合も「いない」場合も、日常生活上の支援者として民生委員は約1割半と同じ程度の割合を占めている。

4) 緊急時の支援者の有無と地域との関わり

①緊急時の支援者の有無と近所づきあい

近所づきあいの程度を緊急時の支援者の有無別に集計して見てみよう（表30）。

緊急時の支援者が「いる」場合には、「近所づきあいをしている」人の割合が61.0%、「普通」が23.4%で、「近所づきあいをしていない」人の割合は15.7%であった。緊急時の支援者が「いない」場合には、「近所づきあいをしている」人の割合は32.6%、「普通」が20.9%で、「近所づきあいをしていない」人の割合は46.5%にのぼった。

表30 近所づきあいの程度（3区分）×緊急時支援者の有無

近所づきあいの程度（3区分）	緊急時支援者がいる		緊急時支援者がいない		合計	
	実数	%	実数	%	実数	%
近所づきあいをしている	300	61.0	14	32.6	314	58.7
普通	115	23.4	9	20.9	124	23.2
近所づきあいをしていない	77	15.7	20	46.5	97	18.1
合計	492	100.0	43	100.0	535	100.0

※無回答は集計から除く。 $\chi^2=26.315$ 自由度 2 $p=0.000^*$ * $p<0.05$

近所の人との付き合い方のうち、「近所の人とはあまり話さない」「近所の人とは一緒にでかけない」「近所の人に頼みごとはしない」について、緊急時の支援者の有無別に集計した（表31）。緊急時の支援者が「いる」場合には、「近所の人とあまり話さない」人の割合は8.5%であるが、支援者が「いない」場合には32.4%と高くなる。「近所の人とは一緒に出かけない」人の割合は16.2%、「近所の人に頼みごとはしない」人の割合は29.7%で、いずれも、緊急時の支援者が「いる」場合に比べて高い。

表31 近所の人との付き合い方（複数回答・抜粋）×緊急時支援者の有無

近所の人との付き合い方	緊急時支援者がいる (n=482)		緊急時支援者がいない (n=37)		合計 (n=519)	
	実数	%	実数	%	実数	%
近所の人とはあまり話さない	41	8.5	12	32.4	53	10.2
近所の人とは一緒に出かけない	45	9.3	6	16.2	51	9.8
近所の人に頼みごとはしない	60	12.4	11	29.7	71	13.7

②緊急時の支援者の有無と友人の有無・社会参加

親しい友人・知人の有無はどうか（表32）。緊急時の支援者が「いる」場合には、親しい友人・知人が「いる」人の割合が89.1%であるが、支援者が「いない」場合には、親しい友人・知人が「いない」人の割合が40.5%にもものぼる。

また、地域の活動への参加についても（表33）、緊急時の支援者が「いる」グループの方が、「参加している」と回答する人の割合が高く（65.0%）、支援者が「いない」グループでは58.1%が社会参加活動に「参加していない」と回答した。

緊急時の支援者がいない人は、家族・親族とのつながりが薄いだけでなく、近所づきあいが希薄で、社会参加活動への参加も少なく、近隣住民とのつながりが弱い人が多いことがわかる。

表32 親しい友人・知人の有無×緊急時支援者の有無

親しい友人・知人の有無	緊急時支援者が いる		緊急時支援者が いない		合計	
	実数	%	実数	%	実数	%
親しい友人・知人がいる	440	89.1	25	59.5	465	86.8
親しい友人・知人はいない	54	10.9	17	40.5	71	13.2
合計	494	100.0	42	100.0	536	100.0

※無回答は集計から除く。 $\chi^2=29.403$ 自由度 1 $p=0.000^*$ * $p<0.05$

表33 社会参加活動への参加有無×緊急時支援者の有無

社会参加活動への参加有無	緊急時支援者が いる		緊急時支援者が いない		合計	
	実数	%	実数	%	実数	%
社会参加活動に参加している	320	65.0%	18	41.9%	338	63.2%
社会参加活動に参加していない	172	35.0%	25	58.1%	197	36.8%
合計	492	100.0%	43	100.0%	535	100.0%

※無回答は集計から除く。 $\chi^2=9.134$ 自由度1 $p=0.000^*$ * $p<0.05$

(5) 地区ごとの特徴

ここでは、地区別にいくつかの項目についてクロス集計をしている。ただし、地区ごとの実数が少ないため、表38以降の分析は、厳密なものではない。

1) 性別・年齢

宮古島市は合併前の市町村を行政区としている。地区別に性別を見てみると(表34)、男女の構成割合には地区によるばらつきが見られた。本調査の回答者全体では、男性が28.2%、女性が71.8%となっている。城辺地区と平良地区では、男性の割合がそれぞれ34.8%、30.2%で3割を超え、回答者全体の性別の構成割合に近い値を示した。一方、上野地区は男性の割合が19.6%、下地区は16.7%で、城辺地区や平良地区に比べて低い。また、伊良部地区では、男

性はわずか9.1%（4人）であった。

次に、年齢階層について地区別に見てみたい（表35）。「65歳以上70歳未満」の人の割合が高かったのは上野地区で18.0%となっている。その他、城辺地区（13.0%）と平良地区（14.4%）では1割を超えた。一方、伊良部地区は6.8%（3人）、下地地区は0人であった。「70歳以上80歳未満」の人の割合は、上野地区が44.0%で5地区中最も高く、次いで平良地区が38.8%であった。伊良部地区（25.0%）、城辺地区（29.8%）、下地地区（23.8%）は、2割半から3割弱であった。「80歳以上90歳未満」の人の割合が高かったのは、伊良部地区（56.8%）、城辺地区（48.6%）、下地地区（52.4%）で、5割弱から5割半を占めた。一方、上野地区は28.0%、平良地区は37.8%で比較的低い割合であった。「90歳以上」の人の割合が高かったのは下地地区で、23.8%を占めた。そのほかの5地区は1割前後であった。

表34 性別×地区

性別	伊良部		上野		城辺		下地		平良		合計	
	実数	%	実数	%	実数	%	実数	%	実数	%	実数	%
男性	4	9.1	10	19.6	72	34.8	7	16.7	64	30.2	157	28.2
女性	40	90.9	41	80.4	135	65.2	35	83.3	148	69.8	399	71.8
合計	44	100.0	51	100.0	207	100.0	42	100.0	212	100.0	556	100.0

※無回答は集計から除く。 $\chi^2=17.384$ 自由度4 $p=0.002^*$ * $p<0.05$

表35 年齢階層×地区

年齢階層	伊良部		上野		城辺		下地		平良		合計	
	実数	%	実数	%	実数	%	実数	%	実数	%	実数	%
65歳以上70歳未満	3	6.8	9	18.0	27	13.0	0	0.0	30	14.4	69	12.5
70歳以上80歳未満	11	25.0	22	44.0	62	29.8	10	23.8	81	38.8	186	33.6
80歳以上90歳未満	25	56.8	14	28.0	101	48.6	22	52.4	79	37.8	241	43.6
90歳以上	5	11.4	5	10.0	18	8.7	10	23.8	19	9.1	57	10.3
合計	44	100.0	50	100.0	208	100.0	42	100.0	209	100.0	553	100.0

※無回答は集計から除く。 $\chi^2=30.956$ 自由度12 $p=0.002^*$ * $p<0.05$

また、年齢階層を65歳以上75歳未満の前期高齢者と75歳以上の後期高齢者の2つに区分して地区別に集計すると(表36)、伊良部地区、下地地区は後期高齢者が8割を超えて年齢が高く、城辺地区は後期高齢者が75.0%、上野地区、平良地区は前期高齢者が3割を超えて比較的若い世代が多いことがわかる。

表36 年齢階層(2区分)×地区

年齢階層 (2区分)	伊良部		上野		城辺		下地		平良		合計	
	実数	%	実数	%	実数	%	実数	%	実数	%	実数	%
前期高齢者	6	13.6	18	36.0	52	25.0	7	16.7	68	32.5	151	27.3
後期高齢者	38	86.4	32	64.0	156	75.0	35	83.3	141	67.5	402	72.7
合計	44	100.0	50	100.0	208	100.0	42	100.0	209	100.0	553	100.0

※無回答は集計から除く。 $\chi^2=11.878$ 自由度 4 $p=0.018^*$ * $p<0.05$

なお、地区別の平均年齢は、表37のとおりである。

表37 地区別平均年齢

地区名	伊良部	上野	城辺	下地	平良	全体
平均値(歳)	82.2	77.5	79.9	83.9	78.7	79.7

2) 職業

本人の最も長く就いた職業について、地区別に集計した(表38)。

平良地区を除く4地区では、「自営業(農林漁業)」の割合が6割半から8割弱を占めており、平良地区の23.9%とは大きな開きがあった。伊良部地区は、そのほか「専業主婦」の割合が20.0%と高い。これは、伊良部地区の回答者の9割が女性であることも影響しているものの、伊良部地区と平良地区の特徴であるともいえる。城辺地区は、「自営業(農林漁業)」が69.5%であるほか、「自営業(商店)」(5.5%)、「勤労者(事務職・販売・サービス業)」(5.0%)、「勤労者(生産現場・技術職)」(6.0%)、「公務員」(5.0%)と5~6%で分散した。

平良地区は、「自営業（農林漁業）」の割合が5地区中最も低く23.9%で、「自営業（商店）」が18.0%と5地区中最も高かった。「勤労者（事務職・販売・サービス業）」(9.3%)、「勤労者（生産現場・技術職）」(9.8%)、「公務員」(8.3%)などの勤労者の割合は8～9%で分散している。また、「専業主婦」は17.1%で、5地区中2番目に高かった。「臨時職・日雇い・パート・アルバイト・派遣職員」は7.3%であった。

表38 本人の最長職（区分）×地区

最長職（区分）	伊良部		上野		城辺		下地		平良		合計	
	実数	%	実数	%	実数	%	実数	%	実数	%	実数	%
自営業(農林漁業)	29	64.4	38	79.2	139	69.5	30	76.9	49	23.9	285	53.1
自営業(商店)	0	0.0	0	0.0	11	5.5	1	2.6	37	18.0	49	9.1
勤労者(事務職・販売・サービス業)	4	8.9	1	2.1	10	5.0	0	0.0	19	9.3	34	6.3
勤労者(生産現場・技術職)	1	2.2	2	4.2	12	6.0	1	2.6	20	9.8	36	6.7
公務員	0	0.0	0	0.0	10	5.0	1	2.6	17	8.3	28	5.2
臨時職・日雇い・パート・アルバイト・派遣職員	0	0.0	0	0.0	2	1.0	2	5.1	15	7.3	19	3.5
その他	2	4.4	4	8.3	7	3.5	2	5.1	13	6.3	28	5.2
専業主婦・専業主夫・無職	9	20.0	3	6.3	9	4.5	2	5.1	35	17.1	58	10.8
合計	45	100.0	48	100.0	200	100.0	39	100.0	205	100.0	537	100.0

※無回答は集計から除く。

3) 住宅の種類

住宅の種類について、地区別に集計した(表39)。どの地区も「持ち家（一戸建て）」が最も高く、8割弱から9割半を占めた。5地区中、持ち家率が高かったのは城辺地区(95.7%)、下地地区(95.2%)で、次に上野地区が88.2%、伊良部地区は82.2%であった。持ち家率が最も低かったのは平良地区で、78.9%

であった。平良地区は、「民間借家（一戸建て）」と「民間賃貸アパート」の割合の合計が5地区中最も高く、15.0%を占めている。その他、「県営・市営住宅」の割合が高かったのは伊良部地区であった。

表39 住宅の種類×地区

住宅の種類	伊良部		上野		城辺		下地		平良		合計	
	実数	%	実数	%	実数	%	実数	%	実数	%	実数	%
持ち家（一戸建て）	37	82.2	45	88.2	201	95.7	40	95.2	168	78.9	491	87.5
民間借家 （一戸建て）	3	6.7	2	3.9	5	2.4	1	2.4	6	2.8	17	3.0
民間賃貸アパート	0	0.0	0	0.0	1	0.5	0	0.0	26	12.2	27	4.8
県営・市営住宅	4	8.9	2	3.9	2	1.0	0	0.0	6	2.8	14	2.5
間借り	0	0.0	2	3.9	0	0.0	0	0.0	4	1.9	6	1.1
その他	1	2.2	0	0.0	1	0.5	1	2.4	3	1.4	6	1.1
合計	45	100.0	51	100.0	210	100.0	42	100.0	213	100.0	561	100.0

※無回答は集計から除く。

4) 年間収入

表40は、年間収入を地区別に見たものである。伊良部地区では、「50万円未満」が42.5%と5地区中最も高く、「50万円以上100万円未満」は50.0%で、こちらも5地区中最も高い割合を示した。年間収入が100万円に満たない人の割合は、実に92.5%にものぼっている。

上野地区は、「50万円未満」が38.3%、「50万円以上100万円未満」が36.2%で、年間収入が100万円未満の人の割合は、74.5%であった。

城辺地区は、「50万円未満」が40.3%と5地区中2番目に高く、「50万円以上100万円未満」32.8%で、年間収入が100万円未満の人の割合は、73.1%であった。

下地地区は、「50万円未満」が33.3%、「50万円以上100万円未満」が48.5%で、年間収入が100万円未満の人の割合は、81.8%であった。

平良地区は、「50万円未満」が27.8%で5地区中最も低い割合を示し、「50万

円以上100万円未満」は28.3%でやはり5地区中最も低かった。両者を合わせて、年間収入が100万円未満の人の割合は56.1%と、他の地区に比べて格段に低い割合である。一方、伊良部地区では7.5%、上野地区、城辺地区、下地地区では15%前後であった「100万円以上150万円未満」の人の割合は、平良地区では24.2%と高かった。

このように、年間収入は地区によって差が見られた。ただし自分の経済状況をどのように感じているか尋ねた項目では、地区による差は見られなかった。

表40 年間収入×地区

年間収入	伊良部		上野		城辺		下地		平良		合計	
	実数	%	実数	%	実数	%	実数	%	実数	%	実数	%
50万円未満	17	42.5	18	38.3	75	40.3	11	33.3	55	27.8	176	34.9
50万円以上 100万円未満	20	50.0	17	36.2	61	32.8	16	48.5	56	28.3	170	33.7
100万円以上 150万円未満	3	7.5	7	14.9	26	14.0	5	15.2	48	24.2	89	17.7
150万円以上 200万円未満	0	0.0	3	6.4	9	4.8	1	3.0	23	11.6	36	7.1
200万円以上	0	0.0	2	4.3	15	8.1	0	0.0	16	8.1	33	6.5
合計	40	100.0	47	100.0	186	100.0	33	100.0	198	100.0	504	100.0

※無回答は集計から除く。

5) 外出の状況について

①外出時の主な交通手段

つぎに、表41によって、外出時の主な交通手段について、地区別に見てみよう。

「徒歩」の割合が高かったのは、伊良部地区（36.6%）、下地地区（25.0%）、平良地区（25.2%）であった。上野地区は14.9%、城辺地区は17.3%であった。

「自家用車」の割合は、伊良部地区を除く4地区では、交通手段の中で最も高い割合を占めた。上野地区では42.6%、城辺地区では43.5%、下地地区では

36.1%, 平良地区では28.6%である。しかし、伊良部地区ではわずか4.9%（2人）であり、そのかわりに「バイク・原付」が14.6%で5地区中最も高かった。

「タクシー」の割合が高かったのは、伊良部地区（19.5%）と平良地区（16.7%）であった。

表41 外出時の主な交通手段×地区

外出時の主な交通手段	伊良部		上野		城辺		下地		平良		合計	
	実数	%	実数	%	実数	%	実数	%	実数	%	実数	%
徒歩	15	36.6	7	14.9	33	17.3	9	25.0	53	25.2	117	22.3
自転車	1	2.4	2	4.3	11	5.8	2	5.6	23	11.0	39	7.4
バイク・原付	6	14.6	3	6.4	9	4.7	0	0.0	10	4.8	28	5.3
電動カー	2	4.9	1	2.1	6	3.1	2	5.6	3	1.4	14	2.7
自家用車	2	4.9	20	42.6	83	43.5	13	36.1	60	28.6	178	33.9
バス	1	2.4	5	10.6	19	9.9	3	8.3	3	1.4	31	5.9
タクシー	8	19.5	0	0.0	4	2.1	3	8.3	35	16.7	50	9.5
その他	6	14.6	9	19.1	26	13.6	4	11.1	23	11.0	68	13.0
合計	41	100.0	47	100.0	191	100.0	36	100.0	210	100.0	525	100.0

※無回答は集計から除く。

②車の所有と運転

伊良部地区を除く4地区では、交通手段として最も多くの人が活用しているのが「自家用車」である。そこで、車の所有と運転について、地区別に集計した。

表42は、車の所有について地区別に集計したものである。車を「持っている」と回答した人の割合が高いのは、上野地区（40.0%）と城辺地区（39.1%）で、ともに4割を占めた。次いで、平良地区が30.0%、下地地区が26.8%で、5地区中最も低かったのは伊良部地区の8.9%であった。伊良部地区では、9割の人が車を「持っていない」と回答している。

表42 車の所有×地区

車の所有	伊良部		上野		城辺		下地		平良		合計	
	実数	%	実数	%	実数	%	実数	%	実数	%	実数	%
車を持っている	4	8.9	20	40.0	81	39.1	11	26.8	64	30.0	180	32.4
車を持っていない	41	91.1	30	60.0	126	60.9	30	73.2	149	70.0	376	67.6
合計	45	100.0	50	100.0	207	100.0	41	100.0	213	100.0	556	100.0

※無回答は集計から除く。

続いて、車の運転ができるかどうかについて、地区別に集計した（表43）。車の所有と連動し、車を「運転できる」と回答した人の割合が高かったのは上野地区（40.0%）と城辺地区（39.9%）で4割を占め、平良地区では34.3%、下地地区では26.8%であった。伊良部地区では、「運転できる」と回答した人は11.1%であった。

表43 車の運転ができるかどうか×地区

車の運転	伊良部		上野		城辺		下地		平良		合計	
	実数	%	実数	%	実数	%	実数	%	実数	%	実数	%
車を運転できる	5	11.1	20	40.0	83	39.9	11	26.8	73	34.3	192	34.5
車を運転できない	40	88.9	30	60.0	125	60.1	30	73.2	140	65.7	365	65.5
合計	45	100.0	50	100.0	208	100.0	41	100.0	213	100.0	557	100.0

※無回答は集計から除く。

このように、車の運転や所有については、地区によって違いがあることがわかった。その背景には、地区ごとに男女の構成割合が異なっていたり、年齢階層が異なっていることがあるのではないかと考えられる。すでに見ているように、車の運転ができる人の割合は、女性よりも男性の方が高く、とくに後期高齢期の女性は、運転ができない人の割合が高い。たとえば、車の運転ができない人の割合が突出して高い伊良部地区は、女性の割合が9割にのぼり、後期高齢者も多い。反対に、城辺地区や平良地区は、男性の割合が高い。また、上野

地区は、前期高齢者が多い。このような地区ごとによる年齢や性別の分布の違いにより、車の運転ができるかどうか、地区ごとに異なっている。

5 離島におけるひとり暮らし高齢者の実態と諸課題

最後に、以上見てきた宮古島市におけるひとり暮らし高齢者の実態を踏まえて、本調査から明らかになったものを整理しておきたい。

(1) 沖縄県下の市部で最も高い割合の高齢化率とひとり暮らし高齢者の出現率

すでに冒頭の「ひとり暮らし高齢者の生活と地域性」において述べたように、2010年の国勢調査によれば、宮古島市の高齢者人口の割合は23.2%となっている。この高齢者人口の割合は沖縄県下の市部平均が17.0%となっているが、宮古島市は其中で一番割合が高い。すなわち沖縄県の市部レベルでは、宮古島市は最も高齢化が進んでいる地域ということになる。また、ひとり暮らし高齢者の出現率は、宮古島市では29.9%であり、この割合も市部で最も高い。

2010年の国勢調査データを見ると、65歳以上人口の割合は、全国平均が23.0%であるが、沖縄県の平均は17.4%と全都道府県の中でも最も割合が低い。他方、都道府県別の合計特殊出生率は、2010年、沖縄県が1.86と最も高い。その中で、宮古島市は、全国市区町村別の合計特殊出生率（2008年～2012年のデータ）が2.27で、全国で3番目に高い。

宮古島市は子どもが多く生まれている地域であるが、他方、高齢化率が高く、さらにひとり暮らし高齢者の出現率の高い地域なのである。そして、沖縄県全体は、今後、高齢者の増加率が全都道府県の中で最も高くなるという推計がなされている。

このような位置にある宮古島市のひとり暮らし高齢者の実態を本調査において把握しようとしたのである。

(2) ひとり暮らし高齢者の概括的特徴

まず、本調査で見えてきたひとり暮らし高齢者の特徴を概括的に整理してみよう。

ひとり暮らし高齢者の7割が女性であり、また全体の半数が80歳以上であった。現在の住所に40年以上住んでいる人が6割半となっている。出身地は9割半の人が宮古島市内であった。そして9割の人が持ち家であった。

ひとりで暮らしている年数の平均は17.1年である。健康状態については3割強の人が健康である一方、3割半強の人が健康状態はよくない。一部あるいはほとんど介助が必要な人が全体の2割半に及ぶ。介護保険サービスを利用している人は2割強であった。通院中の人々が6割半いた。緊急通報システムを設置している人は1割である。

さて、本人の最長職は、5割が農業であった。自営業の漁業従事者は0.7%であった。結婚したことがある人は9割、未婚は1割弱である。結婚したことがある人の配偶者の最長職は、半分が農業であった。自営業の漁業従事者は3.5%と少なかった。現在も仕事をしている人は1割弱であった。周りを海に囲まれた離島であり、漁業に従事してきた人が多いと予測していたが、実際はそうではなく、漁業従事者は4%にも達しておらず、大半は農業従事者であった。

日常生活の困りごととしては、買い物がある。買い物で困っている人の割合は全体の2割強であったことは課題として注目したい。困った時の援助者は子どもが6割半となっている。全体の8割は子どもがいる。最も行き来する家族・親族は、子どもが約半数を占めている。その行き来する家族・親族が住んでいるところは、徒歩で行ける範囲が4割、そして市内が5割で、この2つの合計で9割をも占める。またその家族・親族との連絡頻度は、1週間に1回以上が7割半を占めている。

親しい友人・知人がいる人は8割半である。その親しい友人・知人の7割弱は近所の人である。近所づきあいについて、行き来がある人は5割であるが、他方、近所付き合いがあまりない人が2割弱を占める。近所づきあいの内容としては、一緒にお茶飲みをするが5割半となっている。近隣とのつきあいがあることも注目したい。ただ、近所の様子で気になることとして、近所の高齢化（5割弱）、地域とのかかわりをもたない人が増えてきた（1割半）、空き家が増えてきた（1割半）といった地域課題も見えてきた。

社会参加活動をしていない人は全体の4割弱で、社会参加活動に参加しない理由については、4割弱の人は身体の調子が悪いことを理由に挙げている。また一人では参加しにくいという理由を挙げている人が1割半、自分の興味をひくものがないという人が1割となっている。

年間収入については、50万円未満の人が3割を占めている。100万円未満の合計を見ると6割となる。生活に苦しさを感じている人は2割半であった。

緊急時の支援者がいない人は1割弱（8%）であった。また正月三が日をひとりで過ごした人は1割半（14%）である。

宮古島市のひとり暮らし高齢者の特徴として、注目したいことは9割半の人が市内出身ということである。宮古島に生まれ、そして現在も宮古島に暮らしている人がほとんどである。そして9割の人が持ち家で、子どもがいる人は8割となっている。最も行き来する家族・親族は4割が徒歩で行ける範囲に住んでおり、市内を含めると全体の9割にもなる。ただ最も行き来する家族・親族のうち子どもが占める割合は半数であった。

地元の生まれで、在住期間が長いことは、地域との繋がりも深い。親しい友人・知人がいる人が8割半を占めているが、その友人・知人の7割弱は近所の人であった。近所づきあいは深く、5割半が「一緒にお茶飲みをする」程のつきあいをしている。

このように大方の宮古島市のひとり暮らし高齢者は、家族・親族関係と地域

関係がしっかりした生活をしていると言える。しかし、他方、いろいろな課題を抱えるひとり暮らし高齢者がいることも本調査で見えてきたことである。

(3) 見えてきたいくつかの課題

調査結果の分析を踏まえ、いくつかの課題を示したい。

まず、年齢階層、特に「前期高齢者」と「後期高齢者」での違いである。男性は「前期高齢者」が4割、「後期高齢者」が6割であるのに対し、女性は「前期高齢者」が2割、「後期高齢者」が8割となっている。ひとり暮らしの女性の年齢が高いことに注目したい。

未婚率については、男性が2割に対して、女性は5%で、男性で未婚者の割合が高い。生存子がいないと答えた人が、男性は3割であるが、女性は8%に過ぎない。最も行き来する家族について男女別に見ると、男女とも「子ども（配偶者を含む）、孫、親」の割合が最も高いが、その割合は、男性が37%であったのに対して、女性は58%と高かった。他方、家族・親族について「誰ともほとんど行き来がない」人の割合は、女性は8%であったのに対して、男性は17%と高い割合を占めていた。

日常生活上の困りごと（複数回答）を男女別に見ると、男性は、「食事の準備」が22%と最も高く、次いで「買い物」が14%であるが、女性は、「買い物」が26%と最も高く、次いで「通院・薬とり」が21%となっている。男女とも、「買い物」は地域の困りごとと同様に、共通した困りごととなっていると言えよう。女性は全般に外出を伴うものを困りごととして挙げる傾向にある。

以上の日常生活上の困りごとについて、誰に手伝ってもらっているか（複数回答）を男女別に見ると、男女とも「子ども（その配偶者を含む）」が最も割合が高く、次に「兄弟・姉妹」となっているが、その割合は異なっている。男性は「子ども（その配偶者を含む）」と回答した人の割合は45%であったが、女性は72%にのぼった。全体に、男性よりも女性の方が、家族や親族に手伝っ

てもらっていることがわかる。

他方、「手伝ってもらう人がいない」と回答した人の割合は、女性はわずか3%であったのに対して、男性は13%にもなっている。

近所づきあいについて男女別に見てみよう。近所づきあいが親密な人の割合（「互いの家をよく行き来するくらい」と「ときどき行き来するくらい」の合計）は、男性は39%であったのに対して、女性は65%と大きな差がある。一方、近所づきあいが薄い人の割合（「あいさつをかわす程度」と「まったくつきあいがいいない」の合計）は、女性は13%であったのに対して、男性は33%と高かった。男性は、女性よりも近所づきあいが希薄である。

次に、日頃の近所づきあいの内容について男女別に見てみよう。男性は、「一緒にお茶飲みをする」が37%、「おすそわけしあう」が21%であった。また、「近所の人とはあまり話さない」が19%、「近所の人とは一緒に出かけない」が14%、「近所の人に頼みごとはしない」が26%と高い割合を示した。

女性は、「一緒にお茶のみをする」が58%、「おすそわけをしあう」が52%、「一緒に買い物に行く」は14%で、男性に比べて高い割合を示している。一方、「近所の人とはあまり話さない」は7%、「近所の人とは一緒に出かけない」は8%、「近所の人に頼みごとはしない」は9%でいずれも1割に満たなかった。女性に比べて男性の方が、近所の人とのかわりが日常的にも薄いことがうかがえる。

社会参加活動へ参加していない人は4割弱であるが、これについては男女で差はみられなかった。他方、参加している団体・集まりについては（複数回答）、「自治会・部落会」、「モアイ」、「老人会」がそれぞれ2割程度であった。「ゲートボール」、「グラウンドゴルフ」、「地域のサロン活動」についてはそれぞれ1割半前後である。

4割弱を占める「参加していない」人に参加しない理由を尋ねたが（複数回答）、「体の調子が悪い」という理由を挙げている人が4割弱を占めているが、

「ひとりでは参加しにくいから」が16%、「自分の興味をひくものがない」が11%、「近くに活動がない」が6%、「それらの活動を知らない」が2%となっている。

「自分の興味をひくものがない」、「近くに活動がない」、「それらの活動を知らない」といった理由で参加しない人びとが一定割合いるということでは、活動プログラム、広報、プログラムの地域的配置等の改善課題が見えてくる。社会参加を促進するプログラム開発が求められている。

調査から見えてきた課題に外出時の主な交通手段の問題がある。この問題は、過疎地、地方都市でも深刻な課題と言える、交通手段を男女別に見ると、男性は「自家用車」が49%で、「自転車」が15%、「徒歩」が13%であった。一方、女性は「自家用車」と回答した人の割合が27%で、男性に比べると22ポイントも低い。次いで割合が高かったのは「徒歩」で26%であった。男性では1割半を占めた「自転車」は、女性ではわずか5%であり、男性では3%であった「タクシー」が、女性では12%となる。このように男性と女性では、交通手段が異なることがわかる。

自家用車の所有についても男女により割合が異なっている。男性の51%が「持っている」のに対して、女性の場合は「持っている」と回答した人は24%に過ぎない。運転の可否については、「運転できる」と回答した人の割合が、男性では55%であったのに対して、女性は26%であった。

第1次調査の自由回答に交通手段に困っていることについて、次のページのように記している。

運転が可能かどうかを年齢階層ごとに男女別に見ると、前期高齢者の場合には、男女とも6割以上の人「運転できる」と回答しており、運転が可能かどうかについては男女差がないが、後期高齢者のグループでは、「運転できる」と回答した人の割合が、男性では50%であったのに対して、女性は15%となる。

女性	80歳代	外出するための交通手段がない。 公共交通機関が、住まいの近くを通らないため不自由である。
女性	70歳代	外出の際の交通手段がない。 市内にバスを走らせて欲しい。
女性	90歳代	宮古にいる子どもが1人なので、旅行や孫の家へ手伝いに行くときに一人になりとても困る。 宮古にいる子がどこかに行く間は車もなく、どこにも出かけることが出来ない。 宮古にいるときは毎日来てくれるが、孫たちが本土にいるので、そこに行くとは私は一人になり、何もできなくなってしまう。

上記の自由回答の3ケースも女性であり、また年齢が高い人の交通手段の確保は課題と言えよう。

さらに、注目したいことは、日常生活の困りごととして挙がっている買い物困難の問題である。買い物で困っている人の割合は全体の2割強であったことは課題として注目したい。

地域で困っていること（複数回答）について男女別に見ると、男性は、「近所に買い物をする店がない」が23%で最も高く、次いで「近所に外食する店がない」が16%、「台風などの防災対策」が15%であった。

女性は、「台風などの防災対策」が最も高く30%で、次いで「近所に買い物をする店がない」が22%、「交通手段がない・不十分」が20%であった。

女性に対する「台風などの防災対策」は課題といえようが、男女とも「近所に買い物をする店がない」ことについては共通した困りごととなっているのである。

ここで孤立していると思われる人について触れておきたい。正月三が日をひとりりで過ごした人は1割半弱（14%）いた。また緊急時の支援者がいない人は1割弱（8%）いた。緊急時にも誰も来てくれる人がいない状態は、明らかに孤立していると見てよいであろう。緊急時の支援者の有無について、その特徴をここで見ておきたい。

緊急時の支援者の有無を男女別に見ると、緊急時支援者が「いる」場合、男性が25%、女性が75%となっている。反対に、緊急時の支援者が「いない」場合には、男性の割合は54%、女性は47%になる。緊急時の支援者がいない人の半分が男性であり、男性の15%が緊急時の支援者がいない計算になる。なお、女性のうち、緊急時の支援者がいない人の割合は5%である。緊急時の支援者がいない人は、女性の方が男性より10ポイントも少ない。

次に、年齢階層を前期高齢者と後期高齢者の2つに区分し、緊急時の支援者の有無別に見ると、前期高齢者のうちの15%が緊急時の支援者がいない。同様に後期高齢者では4.6%であった。

さらに、男女それぞれにおいて、年齢階層別に緊急時の支援者の有無を見てみると、男性の後期高齢者、女性の前期高齢者と後期高齢者は、緊急時の支援者が「いない」人の割合がそれぞれ8%、9%、4%と低い。しかし、前期高齢期の男性については、支援者が「いない」人の割合が24%にもなっている。前期高齢期の男性で孤立状態にある人は4人に1人となるのである。

緊急時の支援者は子ども（その配偶者を含む）が6割を占めていた。そこで、緊急時支援者の有無別に、生存子の有無を見てみると、緊急時の支援者が「いる」場合には、生存子が「いる」人の割合が90%となっているが、支援者が「いない」場合には、生存子が「いる」人の割合は50%と低くなっている。

なお、家族や親族と過ごすことが多い正月三が日についても、緊急時の支援者が「いない」場合には、「ひとりで過ごした」人が56%と半分を超えている。緊急時の支援者が「いない」人は家族や親族とのつながりが弱いと言えよう。

さらに、注意したいのは、緊急時の支援者がいない人は、日常的な支援についても、家族・親族はもとより、近隣住民にも頼っていない事実である。

緊急時の支援者が「いる」場合も「いない」場合も、同じ程度の割合を占めたのは「民生委員」（「いる」が16%、「いない」が15%）であった。

次に、近所づきあいの程度を緊急時の支援者の有無別に見てみると、緊急時

の支援者が「いる」場合には、「近所づきあいをしている」人の割合が61%、「普通」が23%で、「近所づきあいをしていない」人の割合は16%であった。緊急時の支援者が「いない」場合には、「近所づきあいをしている」人の割合は33%、「普通」が21%で、「近所づきあいをしていない」人の割合は47%にもなっている。

近所の人との付き合い方のうち、「近所の人とはあまり話さない」「近所の人とは一緒にでかけない」「近所の人に頼みごとはしない」について、緊急時の支援者の有無別に見てみると、緊急時の支援者が「いる」場合には、「近所の人とあまり話さない」人の割合は9%であるが、支援者が「いない」場合には32%と高くなる。「近所の人とは一緒に出かけない」人の割合は16%、「近所の人に頼みごとはしない」人の割合は30%となり、いずれも、緊急時の支援者が「いる」場合に比べて高い。

また、社会参加活動への参加についても、緊急時の支援者が「いる」グループの方が、「参加している」と回答する人の割合が高く（65%）、支援者が「いない」グループでは58%が地域の活動に参加していない。

緊急時の支援者がいない人は、家族・親族とのつながりが薄いだけでなく、近所づきあいが希薄で、地域活動への参加も少なく、近隣住民とのつながりが弱いのである。

地区ごとの特徴については、すでに一定の分析を行ったが、地区によって回収数が少なく、統計的分析に限界がある。そのことを前提に、いくつかの特徴を見た。ここでは、外出時の交通手段と車の所有・運転についてのみ言及しておきたい。外出時の主な交通手段について、地区別に見ると、「徒歩」の割合が高かったのは、伊良部地区（37%）、下地地区（25%）、平良地区（25%）であった。上野地区は15%、城辺地区は17%となっている。

「自家用車」の割合は、伊良部地区を除く4地区では、交通手段の中で最も高い割合を占めている。すなわち、上野地区では43%、城辺地区では44%、下

地地区では36%，平良地区では29%となっている。しかし、伊良部地区ではわずか5%であり、そのかわりに「バイク・原付」が15%で5地区中最も割合が高かった。

「タクシー」の割合が高かったのは、伊良部地区（20%）と平良地区（17%）である。

伊良部地区を除く4地区では、交通手段として最も多くの人が活用しているのが「自家用車」である。そこで、車の所有と運転について、地区別に見てみよう。

車の所有について地区別に集計してみると、車を「持っている」と回答した人の割合が高いのは、上野地区（40%）と城辺地区（39%）で、ともに4割を占めた。次いで、平良地区が30%，下地地区が27%で、5地区中最も低かったのは伊良部地区の9%であった。伊良部地区では、9割の人が車を「持っていない」と回答している。

続いて、車の運転の可否について地区別に見ると、車の所有と連動し、車を「運転できる」と回答した人の割合が高かったのは上野地区と城辺地区はともに4割（40%）を占め、平良地区では34%，下地地区では27%であった。伊良部地区では、「運転できる」と回答した人は11%に過ぎない。

このように、車の運転や所有については、地区によって違いがある。その背景には、地区ごとに男女の構成割合が異なり、また年齢階層が異なっていることがある。すでに見ているように、車の運転ができる人の割合は、女性よりも男性の方が高く、とくに後期高齢期の女性は、運転ができない人の割合が高い。たとえば、車の運転ができない人の割合が突出して高い伊良部地区は、女性の割合が9割にのぼり、後期高齢者も多い。反対に、城辺地区や平良地区は、男性の割合が高い。また、上野地区は、前期高齢者が多い。

最後に経済状況について触れておきたい。宮古島市のひとり暮らし高齢者の年間収入については、50万円未満の人が全体の3割を占めている。100万円未

満の合計は6割にもなる。経済意識として、生活に苦しさを感じている人の割合は2割半であった。

第2次調査で訪問したケースでも、「年金のみの収入で、年金額は50万円未満である。生活は苦しいが、生活保護は息子達に迷惑をかけるから受けようとは思わない。山や畑でとってきたもので食事はまかなっている。」(90歳代、女性)とか「収入はほぼ年金のみで2か月に1回6万円で、年間収入は50万円未満であるが、困っているときは子供に仕送りを頼む。」(80歳代、女性)という方がいた。

また、自由回答でも次のような記述があった。

女性	80歳代	年金から差し引かれる額が42,000円で、残りは月に2万円です。生活は厳しいです。
女性	80歳代	年金がだんだん少なくなり苦しい。なんとかしてほしい。
男性	70歳代	健康保険、介護保険、税金など、どういう査定をしているのか不満です。収入のない老人は困っています。良い行政をお願いします。

経済的に不安定なひとり暮らし高齢者の生活にある課題にも目を向けたい。つぎに記述するケースは2次調査で、直接訪問面接をして得た生活の様子である。年齢は90歳代後半の女性で、伊良部地区に住んでいる。

90歳代、女性、伊良部地区

1. 住宅状況・地域環境

住宅はコンクリートだが、中は木造で老朽化している。築80年、平屋、風が吹き抜けている。虫が中に多く入ってきていた。間取りは3部屋でトイレ、お風呂、キッチンがある。周りは住宅街であり、隣の家との距離が近い。買い物は家から下り坂の道を歩いて20分。車は運転していたが、高齢のため警察官から運転するのを止められている。定期的に警察官の見回りがある。

2. 家族・親族関係の状況

本人は6人兄弟であり、今生存しているのは本人を含め2人。

本人は男4人、女3人を産んで育てた。本人が55歳の時、夫が61歳で他界した。子は、本土に全員住んでいて、宮古島にはいない。一番下の息子は40歳で、訪問の3日前に様子を見に対象者の自宅に訪問して来たそうだ。

3. 健康状態

介護保険サービスは全く受けていない。ホームヘルパーが定期的に週1回、訪れている他、体調が悪いときは1日4～5回、訪問にくる。日中歩いていると目眩がするときがある。常日頃から近辺を歩いているが、腰が痛くて長くは歩くことができない。耳と目が悪く、最近では足がしびれる。目眩がして医者にかかることがあるが、大きい病気をしたことは一度もない。

4. 現在の生活状況

毎朝6時に起きて7時には畑に行って草むしりをして、昼食を食べて昼寝をして、午後は近所の人たちと話すそうだ。社会参加は部落のお祭りや運動会に参加して月1回、老人会に行っている。

5. 緊急時の支援について

緊急時はホームヘルパーが駆けつけてきてくれ、近くの親戚に連絡がいき、そこから息子達に連絡がいく。実際に自分が倒れたときに気づいてもらえずに命を落とすのではないかと考えると夜も眠れなくなるそうだ。

6. 近所づきあいについて

集落ごとのお祭りや運動会がある。月1回、公民館で集まり、話をしたり踊ったりしている。

7. 毎年の正月三が日・お盆の過ごし方

子供がくる。

8. 生活歴・職業歴

本人は6人兄弟で、貧しい家庭に育った。民生委員は親戚である。今6人兄

弟のうち2人（本人を含め）が生きている。本人は高等小学校を4年で卒業して結婚をした後、子育てを経て、社会福祉協議会の役員として95歳までつとめた。

9. 経済状況

年金のみの収入で、年金額は50万円未満である。生活は苦しいが、生活保護は息子達に迷惑をかけるから受けようとは思わない。山や畑でとってきたもので食事はまかなっている。

10. 今後の生活について考えていること

これからも年金で暮らしていくのは変わらないが、体が動かなくなったら老人ホームに入りたい。

11. その他

なし。

12. 調査員の所見

とてもよくお話をする方だった。耳と目が悪く、自分がひとり暮らしをしていることに不安を感じている。息子や娘達に迷惑をかけたくないという思いが強いので、なかなか一緒に暮らそうとは言えないし、生まれてからずっと宮古島にいたので、本土に行っても習慣の違いで様々な障害が出るから、自分は一生この島で暮らすと言っている。「泊まるところがなかったらうちにいつでもおいで」と去り際に何度もおっしゃっていた。

警戒心などが全くなく自分の孫のように接してくれた。帰る時、家から本人がよく行くスーパーを通ったが、歩いていくには遠く、坂もあるので心配だ。